

博多 186

- 博多遺跡群第 235 次・236 次調査の報告 -



遺跡略号 HKT-235 HKT-236
調査番号 1938 1942

2022

福岡市教育委員会



1. 第235次 SK089 遺物出土状況（南より）



2. 第236次 SD074 完掘状況（東より）

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。なかでも博多区祇園町周辺には、弥生時代から近世にかけての遺跡が濃密に存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、ホテル建設に伴う博多遺跡群第235次・第236次発掘調査について報告するものです。この調査では古墳時代から江戸時代にかけての遺構を確認するとともに、多量の遺物が出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社ジャリアをはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は令和元（2019）年度に福岡市教育委員会が行った、博多区祇園町所在の博多遺跡群第235次・236次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に用いた座標系は世界測地系であり、本書の図に用いた方位は座標北である。
3. 検出遺構には3桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴・ピット）、SX（不明遺構）を用いた。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治・山本麻里子・大庭友子が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は野口聰子・今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
9. 本書の執筆は、Vを比佐陽一郎が担当し、その他の執筆と編集は今井が行った。

【第235次調査】

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第235次	遺跡略号	HKT-235
調査番号	1938	分布地図図幅名	天神 49	遺跡登録番号	0121
申請地面積	489.29m ²	調査対象面積	50m ²	調査面積	53m ²
調査地	福岡市博多区祇園町149番4他6筆		事前審査番号	29-2-551	
調査期間	令和元（2019）年8月20日～令和元（2019）年9月25日				

【第236次調査】

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第236次	遺跡略号	HKT-236
調査番号	1942	分布地図図幅名	天神 49	遺跡登録番号	0121
申請地面積	264.13m ²	調査対象面積	50m ²	調査面積	52m ²
調査地	福岡市博多区祇園町76番5		事前審査番号	30-2-1253	
調査期間	令和元（2019）年9月26日～令和元（2019）年11月12日				

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 第235次調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 第1面の調査	8
3. 第2面の調査	12
4. 第3面の調査	24
5. 第4面の調査	29
6. 他の出土遺物	32
7.まとめ	34
IV 第236次調査の記録	39
1. 調査の概要	39
2. 第1面の調査	41
3. 第2面の調査	46
4. 第3面の調査	53
5. 他の出土遺物	55
6.まとめ	56
V 博多遺跡群第235・236次調査出土ガラス製品の保存科学的調査	61

挿図目次

第1図 博多遺跡群と周辺遺跡 (1/25000)	第22図 SK086出土遺物実測図① (1/3)
第2図 博多遺跡群調査地点位置図	第23図 SK086出土遺物実測図② (1/3)
第3図 調査区位置図 (1/1000)	第24図 SK092・095出土遺物実測図 (1/3)
【第235次調査】	第25図 SP069出土遺物実測図 (1/3)
第4図 第235次調査区位置図 (1/200)	第26図 2面その他の出土遺物実測図 (1/3)
第5図 調査区全体図 (1/100)	第27図 SK084・089・098・099実測図 (1/20)
第6図 1区南壁土層実測図 (1/60)	第28図 SK084出土遺物実測図 (1/3)
第7図 SK022・028実測図 (1/40)	第29図 SK089・098・099出土遺物実測図 (1/2・1/3)
第8図 SK022出土遺物実測図 (1/3)	第30図 SP087・097出土遺物実測図 (1/3)
第9図 SK026出土遺物実測図 (1/3)	第31図 066・067・090出土遺物実測図 (1/2・1/3)
第10図 SK027出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	第32図 SD072・104・106実測図 (1/40)
第11図 SK028出土遺物実測図 (1/3)	第33図 SD104・106出土遺物実測図 (1/3・1/4)
第12図 SP004・031出土遺物実測図 (1/3)	第34図 SK076・077・SX075実測図 (1/40)
第13図 010・012・032・033出土遺物実測図 (1/3)	第35図 SK071・076・077出土遺物実測図 (1/3)
第14図 SD082実測図 (1/40)	第36図 SX075出土遺物実測図 (1/3)
第15図 SD082出土遺物実測図 (1/3)	第37図 074、105、その他の出土遺物実測図 (1/2・1/3)
第16図 SK043・053・056・083・085・086・092・095実測図 (1/40)	第38図 その他の出土遺物実測図① (1/3)
第17図 SK043出土遺物実測図 (1/3)	第39図 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)
第18図 SK053出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	【第236次調査】
第19図 SK056・061出土遺物実測図 (1/2・1/3)	第40図 第236次調査区位置図 (1/300)
第20図 SK083出土遺物実測図 (1/3)	
第21図 SK085出土遺物実測図 (1/3)	

第41図	調査区全体図 (1/100)	第53図	SK048出土遺物実測図 (1/3)
第42図	調査区土層実測図 (1/60)	第54図	SK050出土遺物実測図 (1/3)
第43図	SD011・SK004出土遺物実測図 (1/40)	第55図	SK052出土遺物実測図 (1/3)
第44図	SD011出土遺物実測図 (1/3)	第56図	SP038・047・054出土遺物実測図 (1/3)
第45図	SE003・SK004出土遺物実測図 (1/3)	第57図	053・068・081出土遺物実測図 (1/2・1/3)
第46図	SP010出土遺物実測図 (1/3)	第58図	SD074実測図 (1/60)
第47図	SX001実測図 (1/40)	第59図	SD074出土遺物実測図 (1/3)
第48図	SX001出土遺物実測図① (1/3・1/4)	第60図	SK071・075実測図 (1/40)
第49図	SX001出土遺物実測図② (1/3)	第61図	SK071・075出土遺物実測図 (1/3)
第50図	SK022・028・029・040・048・052実測図 (1/40)	第62図	SP078、その他の4面出土遺物実測図 (1/3)
第51図	SK022・028・029出土遺物実測図 (1/1・1/3)	第63図	その他の出土遺物実測図① (1/3)
第52図	SK040出土遺物実測図 (1/3)	第64図	その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)

図版目次

- 卷頭図版 1. 第235次SK089遺物出土状況（南より）
2. 第236次SD074完掘状況（東より）

【第235次調査】

図版 1	1. 1区1面全景（北より） 3. 1区3面全景（北より） 5. 2区2面全景（南より） 7. 2区4面全景（南より）	2. 1区2面全景（北より） 4. 1区4面全景（北より） 6. 2区3面全景（南より） 8. 1区南壁土層（北より）
図版 2	1. SK022土層（北より） 3. SD082土層（南より） 5. SK056土層（北西より） 7. SK086土層（西より）	2. SK028完掘状況（西より） 4. SK053完掘状況（西より） 6. SK083土層（南より） 8. SK092完掘状況（南東より）
図版 3	1. SK084遺物出土状況（西より） 3. SK089遺物出土状況②（南より） 5. SK089土層（南より） 7. SK077土層（東より）	2. SK089遺物出土状況①（南より） 4. SK089鉄器出土状況（東より） 6. SD104遺物出土状況（北より） 8. SX075土層（北より）
図版 4	出土遺物	

【第236次調査】

図版 5	1. 1面全景（南より） 3. 3面全景（南より）	2. 2面全景（南より）
図版 6	1. 西壁土層（東より） 3. 東壁土層（西より） 5. SX001瓦出土状況①（西より） 7. SX001瓦出土状況③（南より）	2. 南壁土層（北東より） 4. SK004土層（東より） 6. SX001瓦出土状況②（北西より） 8. SX045土層（北より）
図版 7	1. SK040土層（北より） 3. SK071検出状況（東より） 5. SD074②（西より） 7. SD074土層（東より）	2. SK048土層（南より） 4. SD074①（西より） 6. SD074③（東より） 8. SK075土層（北東より）
図版 8	出土遺物	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区祇園町 149 番 4 他におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 29 年 9 月 20 日付で受理した（事前審査番号 29-2-551）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていること、確認調査において現地表面下 180cm で遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関する申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。平成 30 年 10 月 5 日付で株式会社ジャリアを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 10 月 15 日から平成 31 年 1 月 18 日まで発掘調査を実施した（第 222 次調査：福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1416 集）。

第 222 次調査終了後、建築計画に変更が生じ、発掘調査の際に対象範囲外としていた敷地南端部分にも掘削工事が及ぶこととなった。申請者と再度協議を行い、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、この範囲についても改めて発掘調査を行うこととなった。令和元年 8 月 1 日付で株式会社ジャリアを委託者、福岡市長を受託者として再度発掘調査業務委託契約を締結し、同年 8 月 20 日から 9 月 25 日まで発掘調査を実施した（第 235 次調査：本書報告）。

また、当該ホテルの駐車場部分として博多区祇園町 76-5 における埋蔵文化財の有無についての照会を平成 31 年 3 月 26 日付で別途受理した（事前審査番号 30-2-1253）。この申請地も周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれ、過去の確認調査において現地表面下 110cm で遺構が確認されていたが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから発掘調査を実施することで合意した。令和元年 8 月 2 日付で株式会社ジャリアを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 9 月 26 日から 11 月 12 日まで発掘調査を実施した（第 236 次調査：本書報告）。

資料整理は令和 2 年度に行い、報告書作成は令和 3 年度に行った。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社ジャリア

調査主体：福岡市教育委員会（経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課）

（発掘調査：令和元年度、整理報告：令和 2・3 年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波正人
同課調査第 1 係長	吉武学（元年度・2 年度）
	本田浩二郎（3 年度）
調査庶務：文化財活用課管理調整係	松原加奈枝（元年度・2 年度）
	内藤愛（3 年度）
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長	本田浩二郎（元年度・2 年度）
	田上勇一郎（3 年度）
同課事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（元年度・2 年度）
	森本幹彦（3 年度）
同課事前審査係文化財主事	朝岡俊也（元年度）
	山本晃平（2・3 年度）
調査担当：埋蔵文化財課調査第 1 係文化財主事	今井隆博

II 遺跡の立地と環境

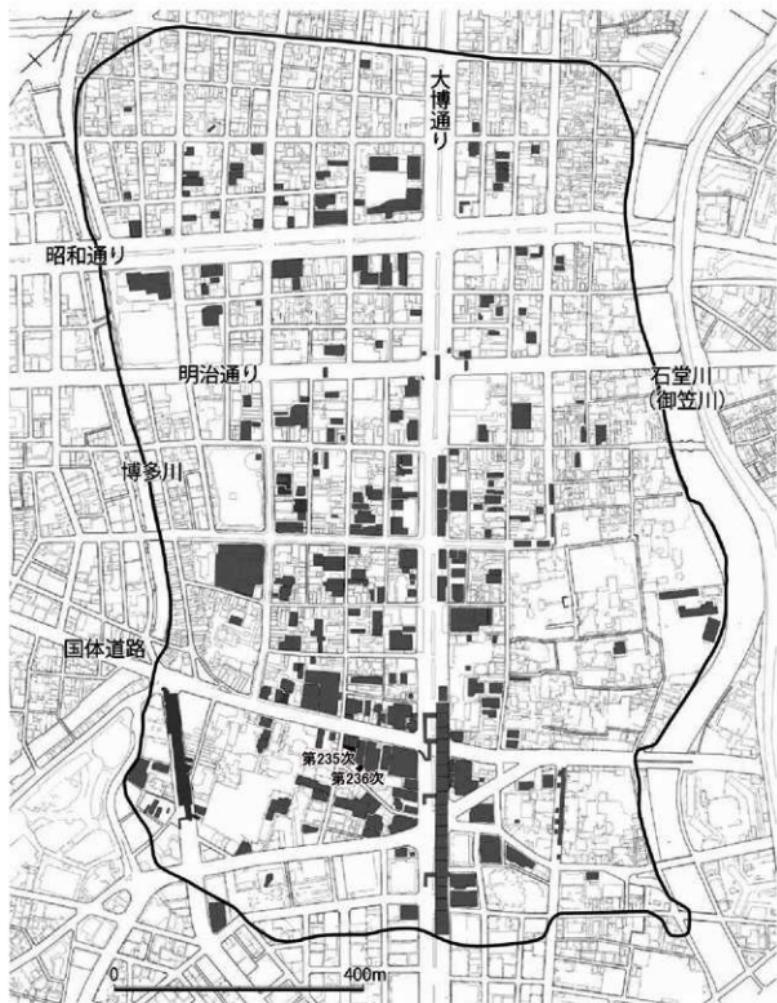
博多遺跡群は、博多湾に面し、西を那珂川と東を御笠川に、南を那珂川に流れ込む旧比恵川に囲まれた砂丘上に立地する複合遺跡である。この砂丘は、沿岸流の作用で砂州が形成された後、陸化した砂州に風成砂が堆積し、海岸に平行する砂丘列となったものである。博多遺跡群がひろがる南北1.6km、東西0.9kmの遺跡範囲には、3つの砂丘列が並んでおり、微高地となった砂丘列の内陸側に取り残された干潟が、河川の作用で埋積され陸化すると、再び新しい砂丘列の形成が始まるといった過程で、陸側から順に海岸に平行する砂丘列が形成されていった。これらの砂丘列は内陸側からI・II・IIIと呼ばれ、陸に近いI・IIの砂丘列を「博多濱」、IIIの砂丘列を「息濱」と呼称している。博多遺跡群では、令和3（2021）年12月までに250次の発掘調査が行われ、博多濱では弥生時代以降の遺構・遺物が連続と確認されており、息濱は古代以降に形成が始まり鎌倉時代以降に都市化したことがわかっている。

博多遺跡群内での遺構の初現は、砂丘列I西側で発見された弥生時代前期後半の土坑や甕棺墓である。弥生時代の人々は、堅穴住居や甕棺墓の分布から、中期前半から後期前半にかけて、砂丘Iと砂丘IIの南側を中心に活動したようである。古墳時代になると、砂丘Iのほぼ全域で遺構・遺物が確認されるようになり、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては集落が拡大する。南東側の比恵・那珂遺跡群に至る对外交流の玄関口として、国内外の他地域から土器等の物資が搬入されただけでなく、鍛冶や玉作りを行っていた痕跡として砂丘I西部を中心とする鉄片、磁石、羽口、碧玉剥片や管玉未製品などが発見されている。また、前方後円墳（博多1号墳）をはじめ、複数の古墳や方形周溝墓、埴輪片も確認されており、これらは、古墳時代前半期における博多遺跡群を拠点とする集団の、福岡平野における社会的な地位を物語っている。

古代では、砂丘Iの最高所付近において、正方位をとる溝が方形に掘削され、石帶や銅製帶金具、墨書須恵器、須恵器硯、皇朝鏡、鴻臚館式瓦、老司式瓦などの特殊な遺物が集中するエリアが出現す



第1図 博多遺跡群と周辺遺跡 (1/25000)



第2図 博多遺跡群調査地点位置図

る。博多遺跡群内に官衙が設置されたという文献記録はないが、このエリアは官衙域と想定され、鴻臚館の機能の一部を担っていた可能性も示唆されている。

鴻臚館が衰退した11世紀後半以降、博多濱西部に宋商人が居留をはじめ、博多遺跡群が新たな对外交流の窓口として機能するようになる。膨大な量の輸入貿易陶磁器や国内各地から搬入された陶器、中国商人の痕跡を示す押圧波状文軒平瓦や墨書き陶磁器をはじめとする遺物がこのことを証している。出土遺物の分布や遺構の配置から、12世紀後半になると、聖福寺の建立を契機に都市化が進み、息濱でも人々が活動を始める。二度にわたる元寇を経て、14世紀代に行われた寺社造営を目的とした



第3図 調査区位置図 (1/1000)

中国との貿易の痕跡は、博多遺跡群では多く見つかっていない。15世紀代になり、博多商人による明との勘合貿易が盛になると、以降は息濱や博多濱北部を中心に埠とならぶ貿易都市として繁栄した。しかし、16世紀後半以降、度重なる兵火によって博多のまちは焼失し、豊臣秀吉による九州平定後、博多全体は長方形街区と短冊形地割で再整備され、中世都市博多は近世都市博多として再生された。近世の博多は戦国時代末の太閤町割を基本として町が発展し、現在に近い地形に近づいていったと考えられている。

本書で報告する235次・236次調査地点は、博多濱のうちでも砂丘列Ⅰの中央部や西側の最高所付近に立地している。周辺ではすでに多数の発掘調査が行われており、弥生時代以降の状況が明らかになりつつある。以下に235次・236次調査地点の成果に関わるものを中心に、周辺で行われた発掘調査成果の概要を記述する。

古墳時代の調査地点は、堅穴住居等の遺構が36・50・133・138・169・173次で発見されており、古墳時代の集落域に立地する。このうち、50次調査では、945号遺構から畿内や山陰系を含む大量の土器とともに、鍛造鉄鎌、水銀朱が付着した片口壺や石杵が、987号住居跡からは鉄錆が大量に付着した砥石も発見されており、鍛冶が行われたことがわかっている。また、27次・38次調査では粘土梆や削竹形木棺を埋葬主体とし、ガラス小玉やベンガラ入り壺、刀子状鉄製品等を副葬する方形周溝墓が発見されている。

古代において調査地点周辺は官衙域と推定されている。東隣で行われた51次調査では正方位の溝が検出され、少し離れた北側の79・172次調査では8世紀代～9世紀前半の住居跡や井戸が確認されている。官衙に関係する遺物としては、鴻臚館式軒平瓦(50次)、和同開珎(36次：南北に並ぶ大型柱穴内から出土)、神功開寶(79次：8世紀末頃の井戸から出土)、須恵器円面鏡・金銅製耳環(222次)、帶金具や石帯(79・172・180・213次)が出土している。

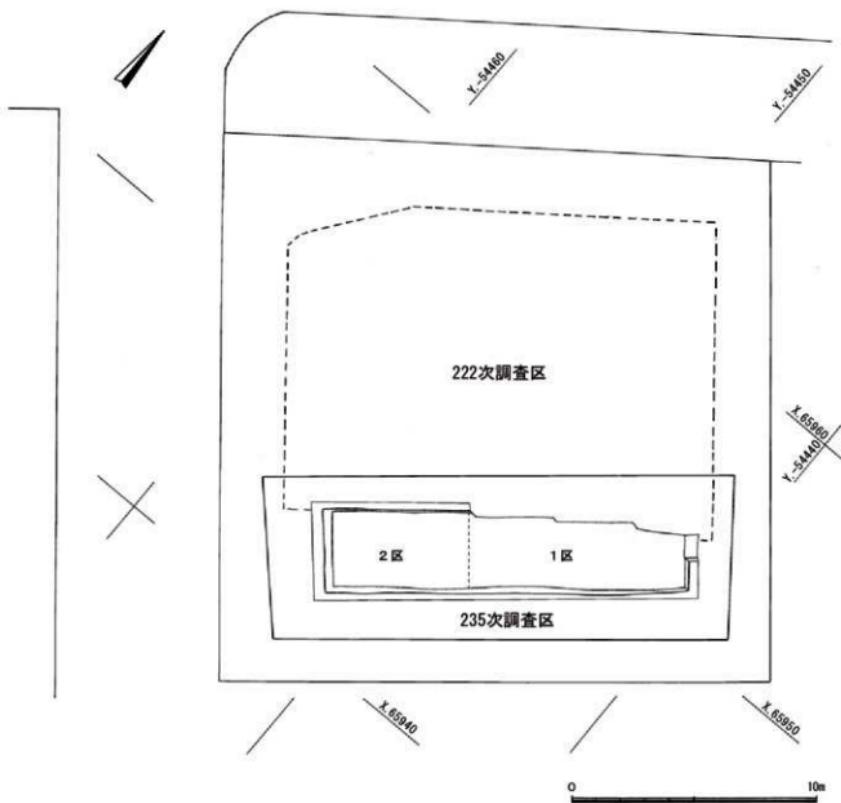
中世に入ると、調査地点の周辺では、50・172・222次調査において出土した、陶器水注を転用した坩埚や未製品等のガラス制作関連遺物が注目される。これまでの調査成果から、中国宋代に開発されたカリウム鉛ガラスが12～13世紀の博多遺跡群の博多濱においてガラスの再溶融と製品への加工が行われたことが分かっている。

III 第 235 次調査の記録

1. 調査の概要

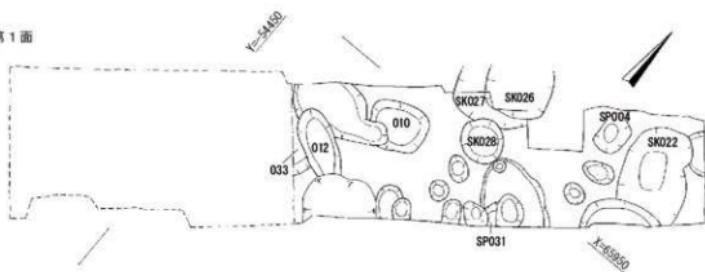
第 235 次調査は祇園町交差点の南東側に位置する。第 222 次調査と同一敷地内で、222 次調査区の南側に隣接する。

令和元年 8 月 20 日に器材搬入、及び表土剥ぎを開始した。本調査では敷地内での排土処理に余裕があったため土留めは設置せず、壁面に傾斜を設けながらの調査とした。調査区を東西に二分割し、東側を 1 区、西側を 2 区とした。1 区では 1 ~ 4 面の調査を行い、9 月 11 日から排土の反転を行い、2 区の調査に着手した。2 区では攪乱により第 1 面が残っておらず、2 ~ 4 面の調査を行った。9 月 19 日に埋め戻し、25 日に器材を撤収して調査を終了した。

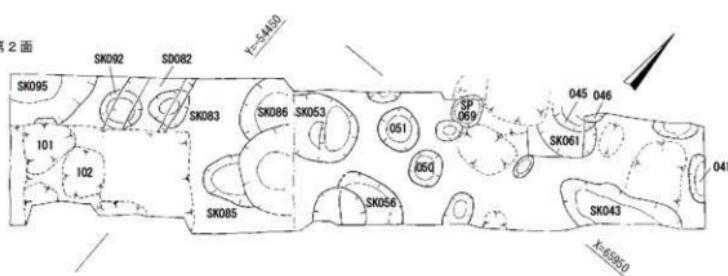


第 4 図 第 235 次調査区位置図 (1/200)

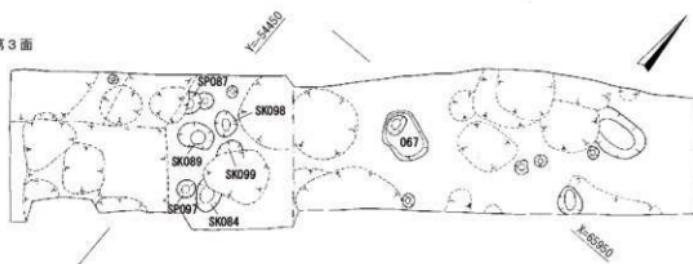
第1面



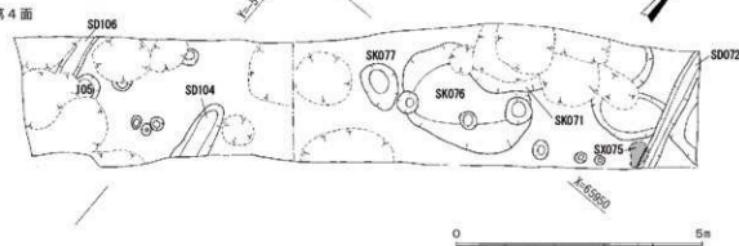
第2面



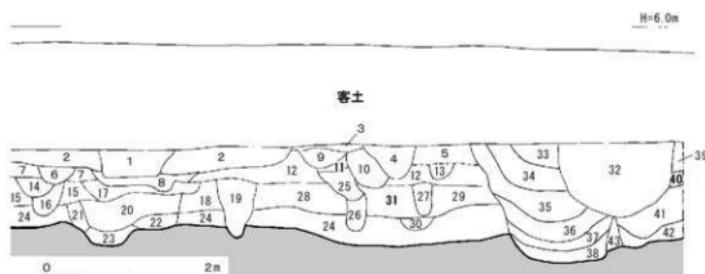
第3面



第4面



第5図 調査区全体図 (1/100)

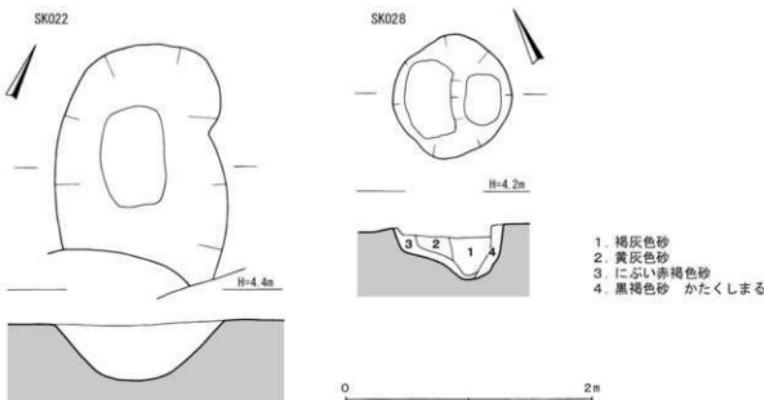


1. 捨乱	16. やや赤みがかった黄灰色砂質土	31. 欠番
2. 黒灰色土 岩泥じり	17. 黄灰色砂質土	32. 捨乱
3. 褐灰色砂質土 槌土ブロック混じり	18. 深い褐色砂	33. 灰褐色砂質土
4. 褐灰色砂質土	19. 茶褐色砂	34. 黑褐色砂質土
5. 黑褐色砂質土	20. 黑褐色砂	35. 黑色砂質土
6. 茶褐色土	21. 黑色砂	36. 黑褐色砂 黑砂・白砂混じる
7. 褐灰色砂質土	22. 黑色砂	37. 灰色砂質土
8. 黑灰色砂	23. 黑色砂 槌土まじり	38. 黑色砂質土
9. 褐灰色砂質土	24. 褐色砂	39. 灰褐色砂質土
10. 灰色砂質土	25. 黑灰色砂	40. 灰褐色砂質土 39より細かい
11. 褐灰色砂質土	26. 黑色砂	41. 黑褐色砂
12. 褐灰色砂質土	27. 深い褐色砂質土	42. 黑色砂と白色砂の混じり
13. 黑褐色砂質土	28. 黑色砂と黒褐色砂の互層	43. 黑色砂と白色砂の互層
14. 黑褐色砂質土	29. 深い褐色砂	
15. 黄灰色砂質土	30. 黄灰色砂質土	

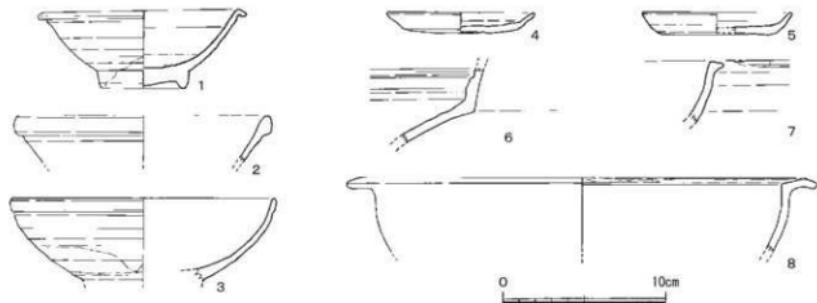
第6図 1区南壁土層実測図 (1/60)

調査前の現況は更地で、標高は 5.8 m 前後であった。第6図に1区南壁の土層図を示した。客土を除去した 4.4 m 付近の黒灰色土を第1面、4.1 m 付近を第2面、3.8 m 付近の褐色砂を第3面、3.6 ~ 3.4 m 付近の黄色砂丘砂を第4面とした。第1面は中世～近世、第2面は中世前半頃、第3面は古代を主とし、第4面は古墳時代～古代と考えている。

検出した遺構は、古墳時代・古代～近世の溝、土坑、ピット等である。出土遺物は古墳時代の土師器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・陶磁器、鉄製品、ガラス製品等で、コンテナケース 30 箱分である。



第7図 SK022・028 実測図 (1/40)



第8図 SK022 出土遺物実測図 (1/3)

2. 第1面の調査

(1) 概要

客土除去後の標高4.4m付近を検出面とした。客土直下の黒灰色土では遺構が判然としないため、掘り下げながら遺構検出を行った。調査区の西半分にあたる2区では全体的に搅乱の影響を受けていたため、第1面は1区のみの調査である。検出した遺構は土坑、ピットのほかに不明瞭な窪みで、中世～近世の所産である。

(2) 遺構と遺物

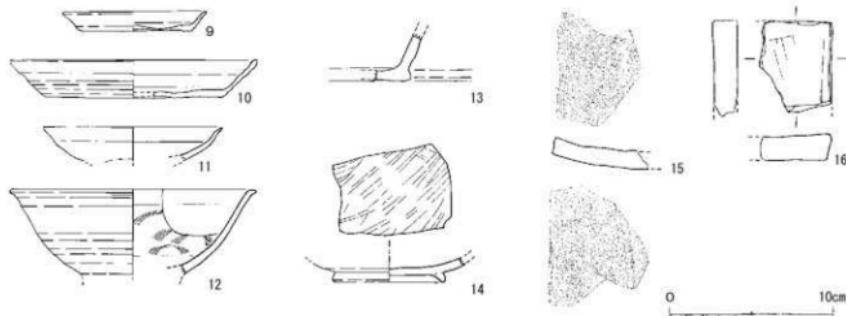
① 土坑 (SK)

SK022 (第7図)

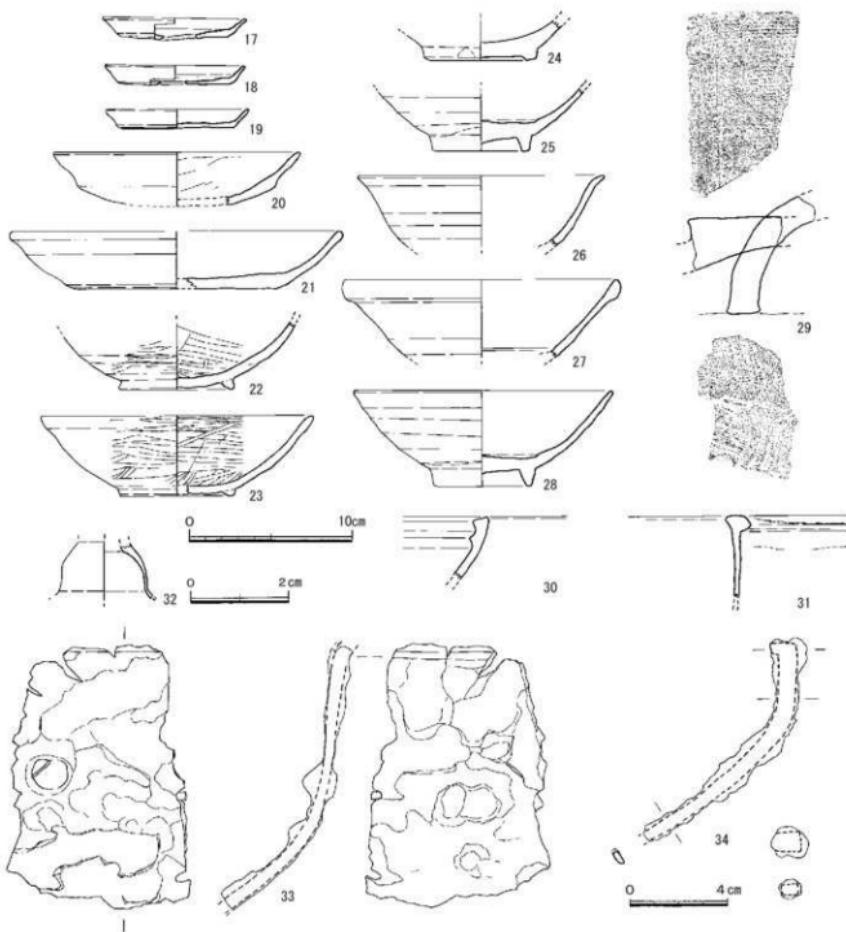
調査区東端で検出した、やや歪な長方形状の土坑である。長軸1.8m以上、短軸1.4mで、深さ45cm。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面はU字形気味である。埋土は黒灰色砂。出土遺物は古代の須恵器、中世の土師器・陶磁器等である。中世後半～近世と思われるが、出土遺物からは明確に判断し難い。

出土遺物 (第8図)

1～3は白磁の小椀と椀、4・5は土師器皿である。6は無釉陶器の壺、7は陶器鉢の口縁部である。8は陶器の盤で、内外面に灰緑色の釉を施す。口縁上面には目跡が残る。



第9図 SK026 出土遺物実測図 (1/3)



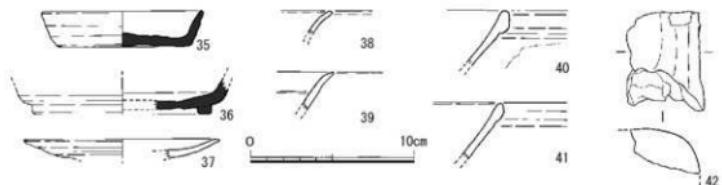
第10図 SK027出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)

SK026

1区中央付近の北壁際に位置する土坑である。第222次調査区にまたがるため、平面形は不明である。埋土は黒色砂、深さ1m以上であった。

出土遺物 (第9図)

9は土師器皿、10は土師器壺。11は白磁皿、12は白磁椀である。13は陶器盤の底部片で、14は瓦器椀の底部である。15は平瓦の破片で、外面には縄目のタタキが、内面には布目痕が認められる。16は厚さ1.6cmの平瓦の角部である。



第 11 図 SK028 出土遺物実測図 (1/3)

SK027

1 区中央付近の北壁際に位置する土坑である。SK026 と同じく第 222 次調査区にまたがるため、平面形は不明である。SK026 に切られる。埋土は黒灰色砂。

出土遺物（第 10 図）

17 ~ 19 は土師器皿。17・18 は底部に穿孔を施す。20・21 は土師器壺、22・23 は瓦器椀である。24 ~ 28 は白磁椀、29 は丸瓦片である。30 は陶器鉢、31 は陶器盤の口縁部である。32 は乳白色のガラス製品で、小壺の蓋と思われる。残存高 1.1cm。第 V 章保存科学分析の報告も参照されたい。33 は鉄製鍋の破片、34 は鉄釘である。

SK028（第 7 図）

1 区の中央付近で検出した、直径 1.0 m の円形土坑である。西側の深さは 20cm、東側の深さは 40cm。埋土は褐灰色～黄灰色砂が主体を占めるが、西側半分の底面には、被熱によると思われる厚さ 10cm 程度の赤褐色砂が見られる。出土遺物は古代の須恵器、中世の土師器・陶磁器等である。

出土遺物（第 11 図）

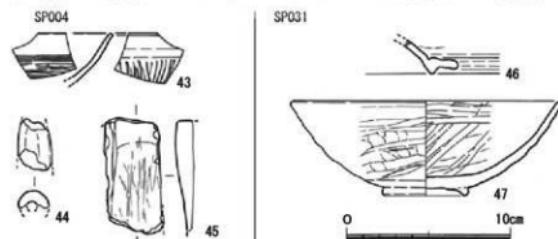
35 は完形の須恵器壺で、口径 9.8cm、器高 2.2cm。36 は高台付きの須恵器壺、37 は縁釉陶器の皿。38 は白磁皿の口縁部、39 ~ 41 は白磁椀の口縁部である。42 は玄武岩製磨製石斧の破片か。

②ピット出土遺物（第 12 図）

43 は初期龍泉窯の青磁碗破片、44 は土錐の破片、45 は泥岩製の砥石片である。43 ~ 45 は SP004 出土。46 は陶器の蓋、47 は土師器壺である。内外面にヘラミガキを施す。46・47 は SP031 出土。

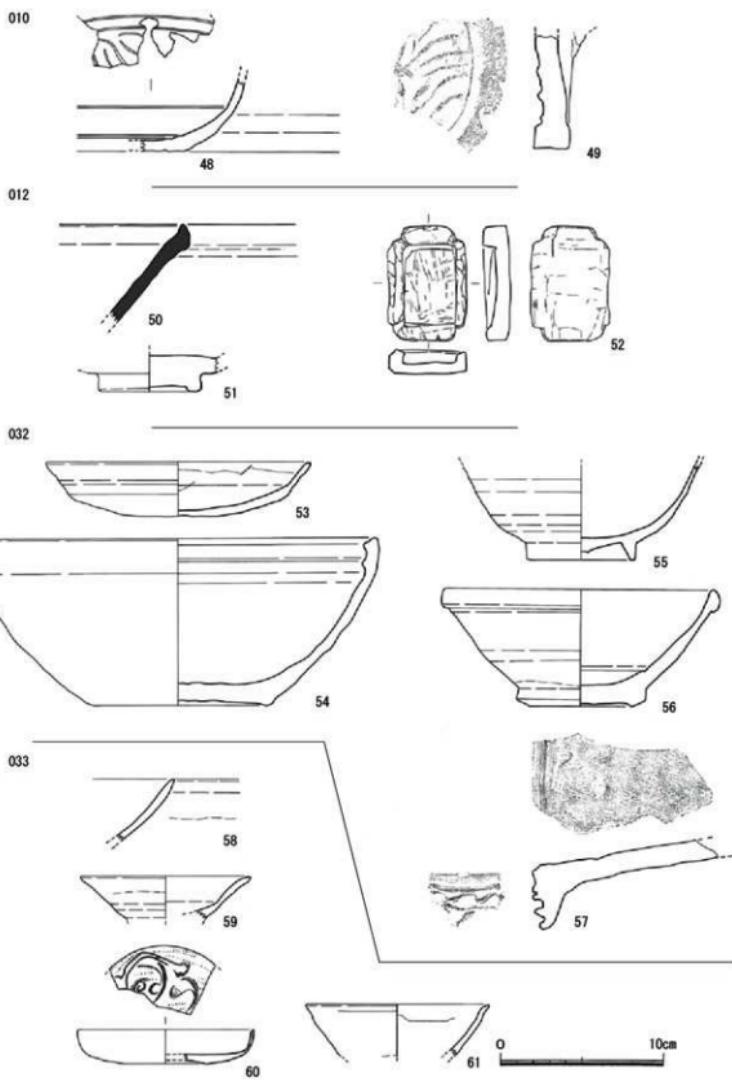
③その他の遺物（第 13 図）

48 は陶器盤の破片で、外面は淡緑色釉、内面は黄色～灰緑色釉を施す。49 は中国系の軒丸瓦。48・49 は調査区中央付近の 010 より出土。50 ~ 52 は調査区中央の 012 より出土。50 は須恵質の鉢口縁部、51 は龍泉窯系青磁碗の高台部、52 は滑石製の硯である。53 ~ 57 は 010・012 の近くで遺物が集中した範囲 032 からの出土である。53 は土師器壺、54 は陶器鉢である。55・56 は白磁碗、57

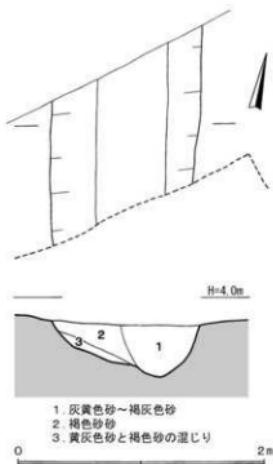


第 12 図 SP004・031 出土遺物実測図 (1/3)

は中国系の軒平瓦である。58 ~ 61 は 1 区西端の 033 より出土した。58 は白磁碗の口縁部、59 は白磁皿。60 は口縁部が垂直気味に立ち上がる白磁皿で、内面に文様を施す。61 は陶器椀である。

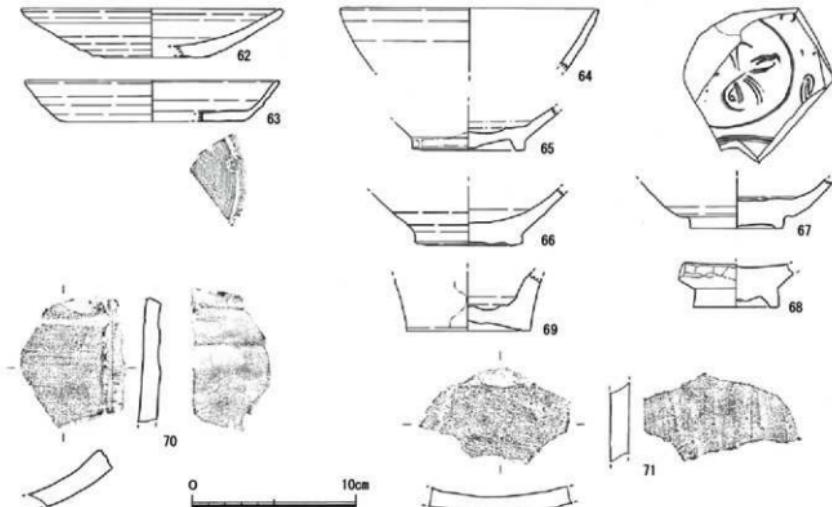


第13図 010・012・032・033出土遺物実測図 (1/3)

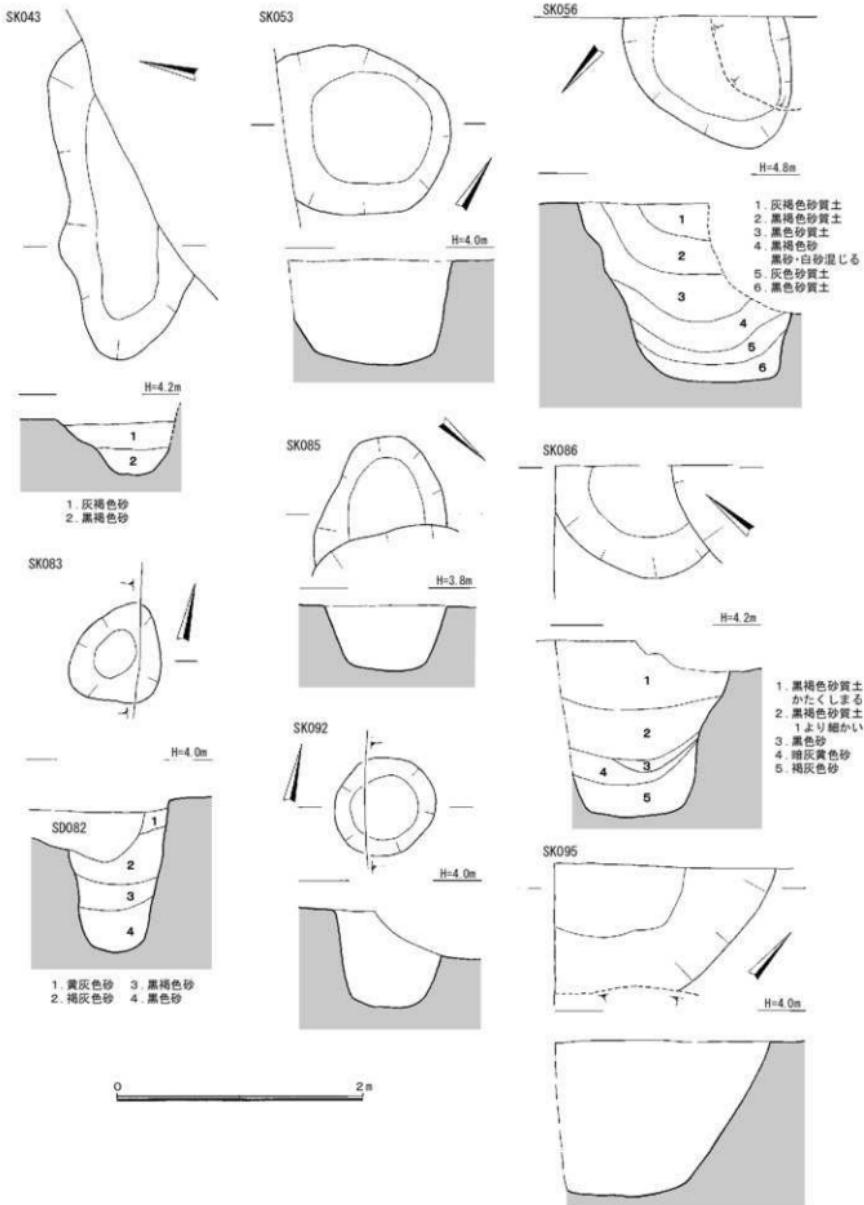


第14図 SD082 実測図 (1/40)

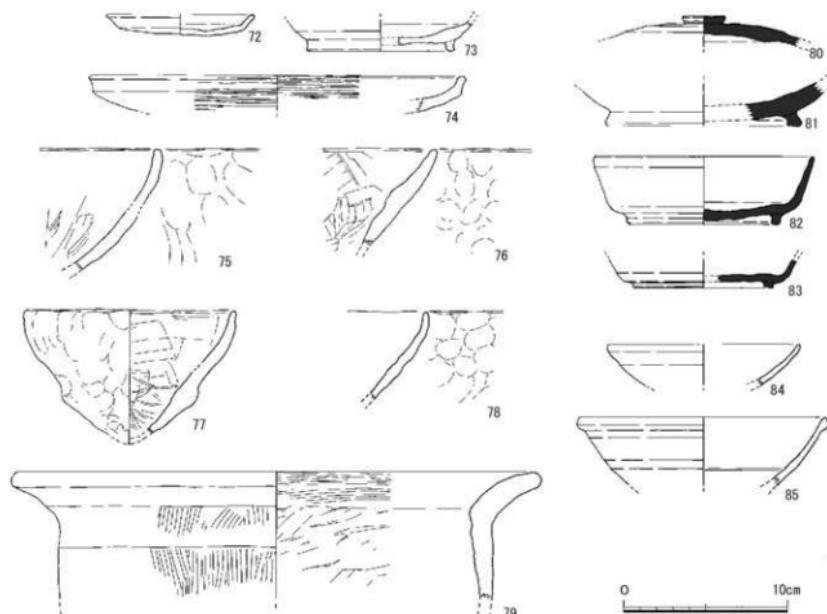
62・63は土師器環で、とともに底部外面は糸切り。64は白磁椀の口縁部、65・66は白磁椀の高台部である。67は青磁椀で内面に文様を施す。68は青磁椀高台部を利用した瓦玉か。69は陶器壺の底部である。70・71は平瓦の破片で、外面には綱目の叩き痕が、内面には布目の痕が残る。



第15図 SD082 出土遺物実測図 (1/3)



第 16 図 SK043・053・056・083・085・086・092・095 実測図 (1/40)



第17図 SK043出土遺物実測図 (1/3)

②土坑 (SK)

SK043 (第16図)

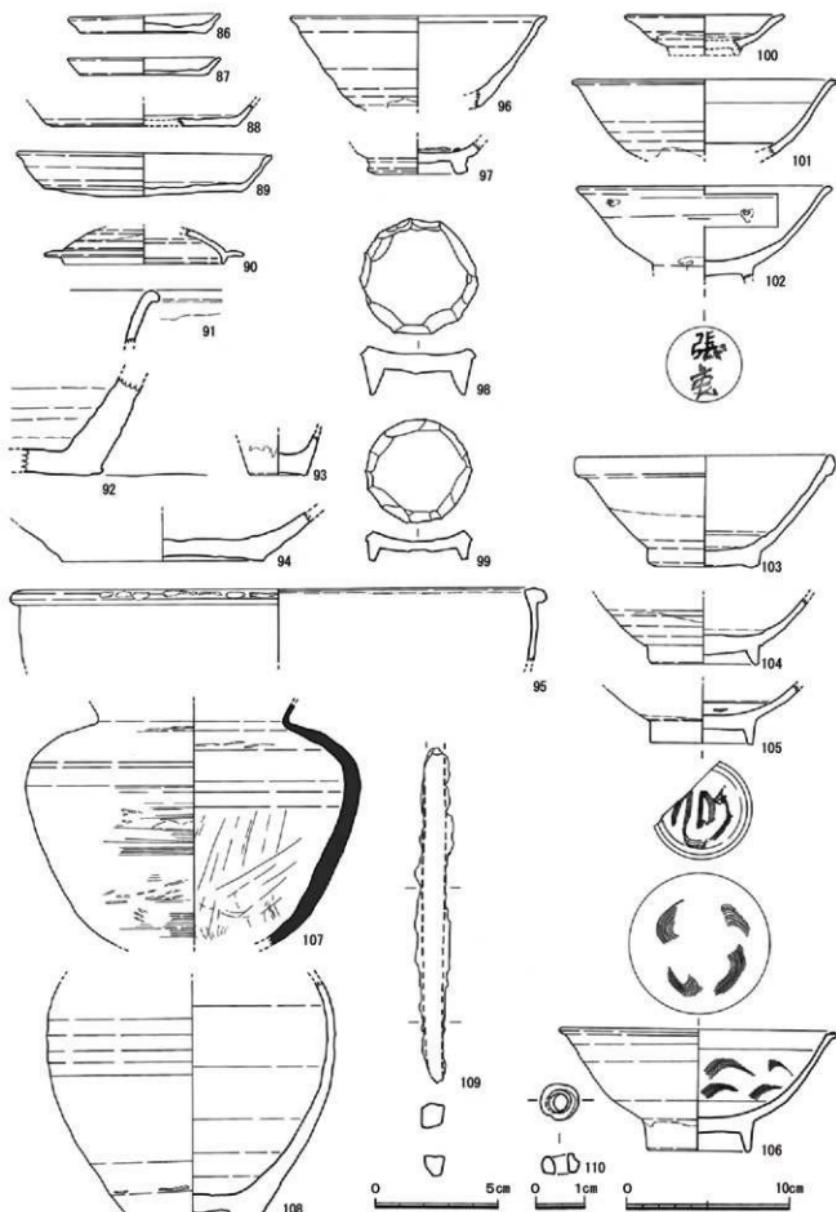
調査区南東端で検出した、長軸2.5m以上、短軸1.0m以上の不整形の土坑である。断面は緩いU字形で、埋土は灰褐色～黒褐色砂である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、製塩土器等である。

出土遺物 (第17図)

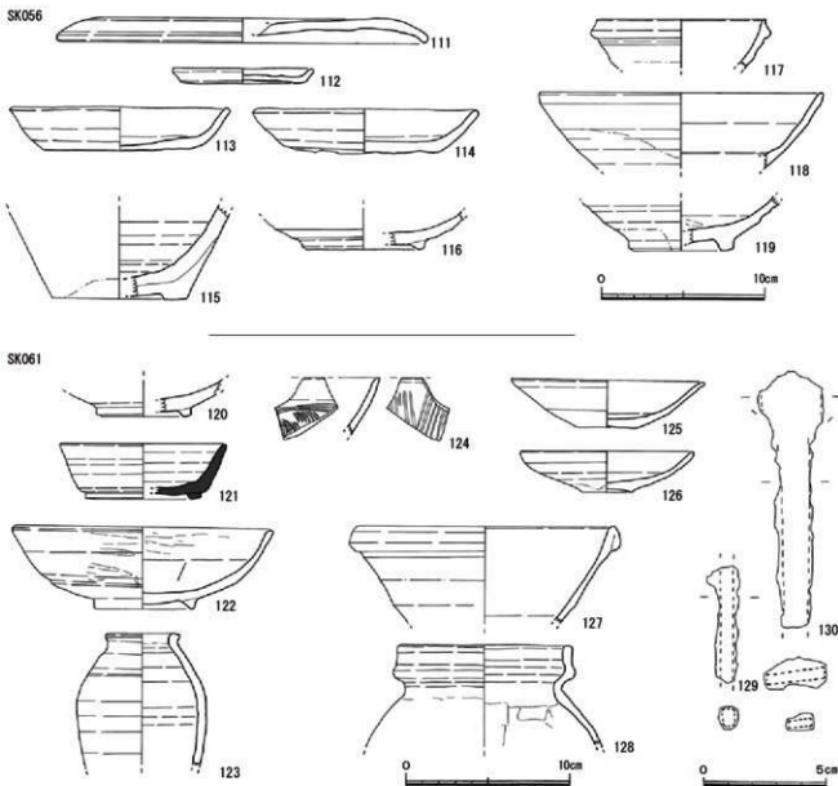
72は土師器皿で、口径9.0cm、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。73は土師器皿の高台部である。74は土師器高杯の口縁部片で、内外面ともに横方向の丁寧な研磨を施す。75～78は製塩土器である。外面には指頭の痕が残り、内面は工具によるナデを施している。79は土師器甕で、復元口径32.4cm。外面にはタテ方向のハケメ、胴部内面にはケズリ、口縁部内面にはヨコ方向のハケメが残る。80～83は須恵器である。80はツマミを有する蓋、81～83は高台付きの壺である。84は白磁の皿、85は玉縁状口縁の白磁碗である。

SK053 (第16図)

1区西端で検出した、長軸1.4m以上、短軸1.3mの円形土坑である。2区で検出したSK086と重複するが、1区と2区の境界付近で重なるため、正確な平面形を把握することができなかった。深さ85cmで、大量の遺物が出土した。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、墨書き土器、瓦器、鉄製品、ガラス小玉等である。



第18図 SK053出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)



第19図 SK056・061出土遺物実測図 (1/2・1/3)

出土遺物（第18図）

86・87は土師器皿で、底部外面はともに糸切りと板状圧痕が残る。88・89は土師器壺である。90～95は陶器である。90はかえりを有する蓋、91は壺か。92は大型の壺の底部で、非常に分厚い。93は小壺の底部、94は鉢の底部である。95は盤の口縁部で、復元口径32.8cm、口縁には目跡が残る。100～106は白磁である。100は小椀、101～106は椀で、102・105の底部外面には墨書きが見られる。107は須恵器の壺、108は陶器の耳壺である。109は鉄釘。110は青色のガラス小玉で、径0.8cm。V章の保存科学分析で詳細を報告している。

SK056（第16図）

調査区中央付近の南壁沿いで検出した、歪んだ円形土坑である。第1面で検出した攪乱に切られるが、壁面土層の観察では、第1面から掘り込まれている。深さ1.4cmで、埋土はレンズ状の堆積をしている。出土遺物は土師器、陶磁器、瓦器等である。第1面から掘り込まれていることから中世後半以降の所産と思われる。

出土遺物（第19図）

111～114は土師器である。111は蓋あるいは皿か。112は皿で、底部は糸切り。113・114は壺で糸切りと板状圧痕が残る。115は陶器壺の底部で、116は瓦器椀の底部である。117は白磁小椀、118は白磁椀、119は高麗青磁椀か。

SK061

1区中央の北壁沿い付近で検出した、円形土坑である。第1面で検出したSK026と045に切られしており、平面規模、深さは不明である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、鉄製品等である。

出土遺物（第19図）

120は土師器椀の底部、121は高台付きの須恵器壺である。122は瓦器椀、123は陶器壺である。124は青磁椀の口縁部で、内外面に文様を施す。125・126は白磁皿、127は白磁椀。128は二重口縁の土師器壺である。129は鉄釘、130は鉄鍼か。

SK083（第16図）

2区中央の北壁際で検出した、直径0.8mの歪んだ円形土坑である。SD082に切られる。深さ1.2mで、埋土は褐灰色砂～黒褐色砂が堆積している。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、瓦、砥石等が大量に出土した。墨書き土器も含まれている。

出土遺物（第20図）

131は土師器皿で口径8.2cm、底部は回転糸切りである。132～134は土師器壺で、底部は丸みを帯びたものと回転糸切りのものがある。135は土師器高壺としたが、天地逆で高壺脚部の可能性もある。136は須恵器の壺蓋、137・138は高台付きの須恵器壺である。139・140は瓦器椀で、内外面にヘラミガキを施す。141～147は白磁である。141は椀で、底部外面に「大」の墨書が残る。143～146は椀の底部で、146の底部外面には「綱」の墨書が見られる。147は青磁椀で、底部外面に墨書が見られるが判然としない。148は陶器壺の口縁部、149は陶器壺の底部、150は陶器壺の胴部～底部である。151は丸瓦片で、外面には繩目叩き、内面には布目痕が残る。152は花崗岩製の砥石、153は花崗岩製の磨石・叩き石である。

SK085（第16図）

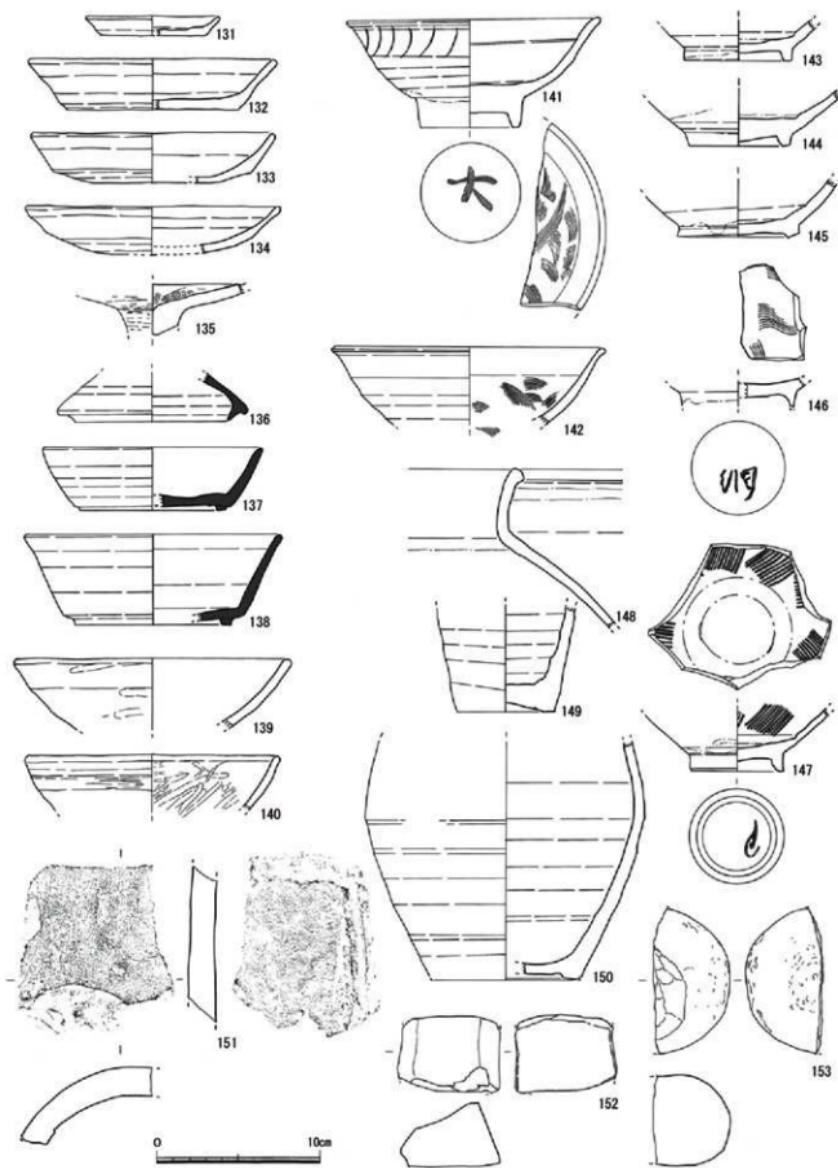
調査区中央付近で検出した土坑である。他の遺構に切られており平面形は不明だが、長軸1.0m以上、短軸1.0m、深さ50cmを測る。埋土は黒灰色砂で、古墳時代の土師器、中世の土師器、陶磁器、製塙土器等、多量の遺物が出土した。

出土遺物（第21図）

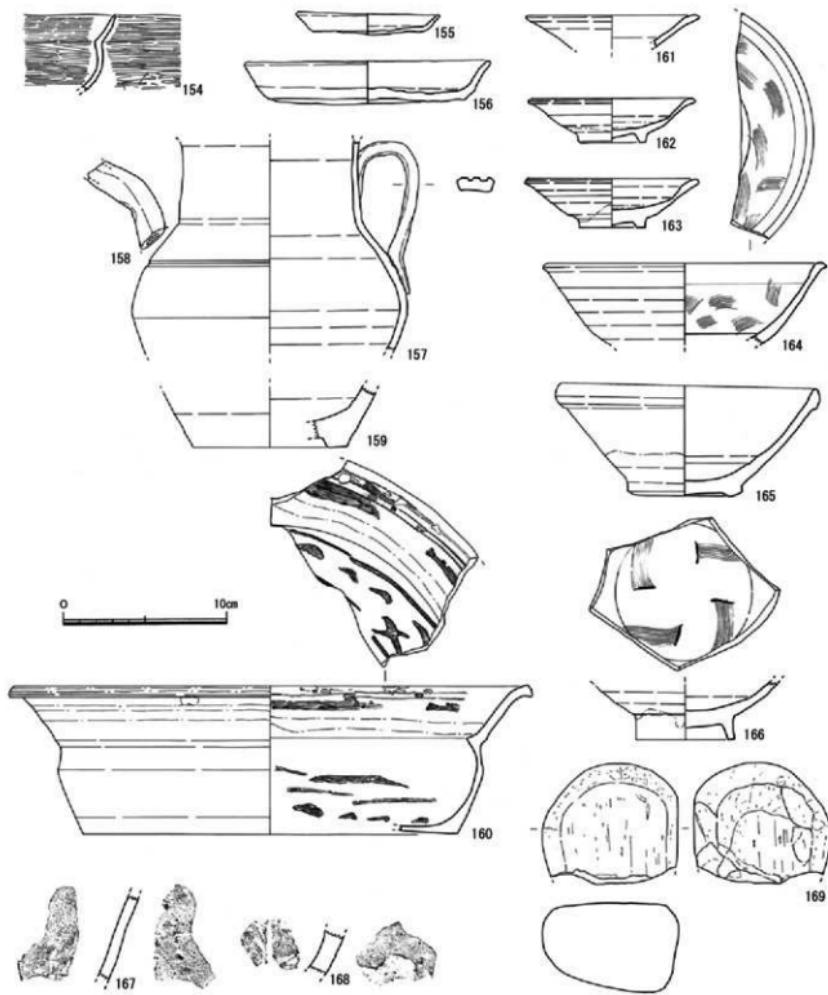
154は古墳時代の丸底壺で、内外面に緻密なヘラミガキを施す。155は土師器皿、156は土師器壺で、ともに底部は回転糸切りである。157～159は陶器水注で灰オリーブ色釉を施す。接合しないが、同一個体と思われる。160は陶器盤で浅黄色の釉を施し、口縁部外面には目跡が残る。161～163は白磁皿で、162・163は内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。164～166は白磁椀である。167・168は製塙土器で、内面には布目痕が残る。169は磨石・叩き石か。

SK086（第16図）

2区東端で検出した、径1.3m以上の土坑である。他の遺構に切られているうえに、調査区外に広がるため規模は不明であるが、推定1.7m程度の円形土坑と思われる。深さは1.4mで、埋土は黒褐色～褐灰色砂がレンズ状に堆積している。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、瓦、製塙土器、滑石製品等が大量に出土した。赤く焼けたような石も混じっていた。



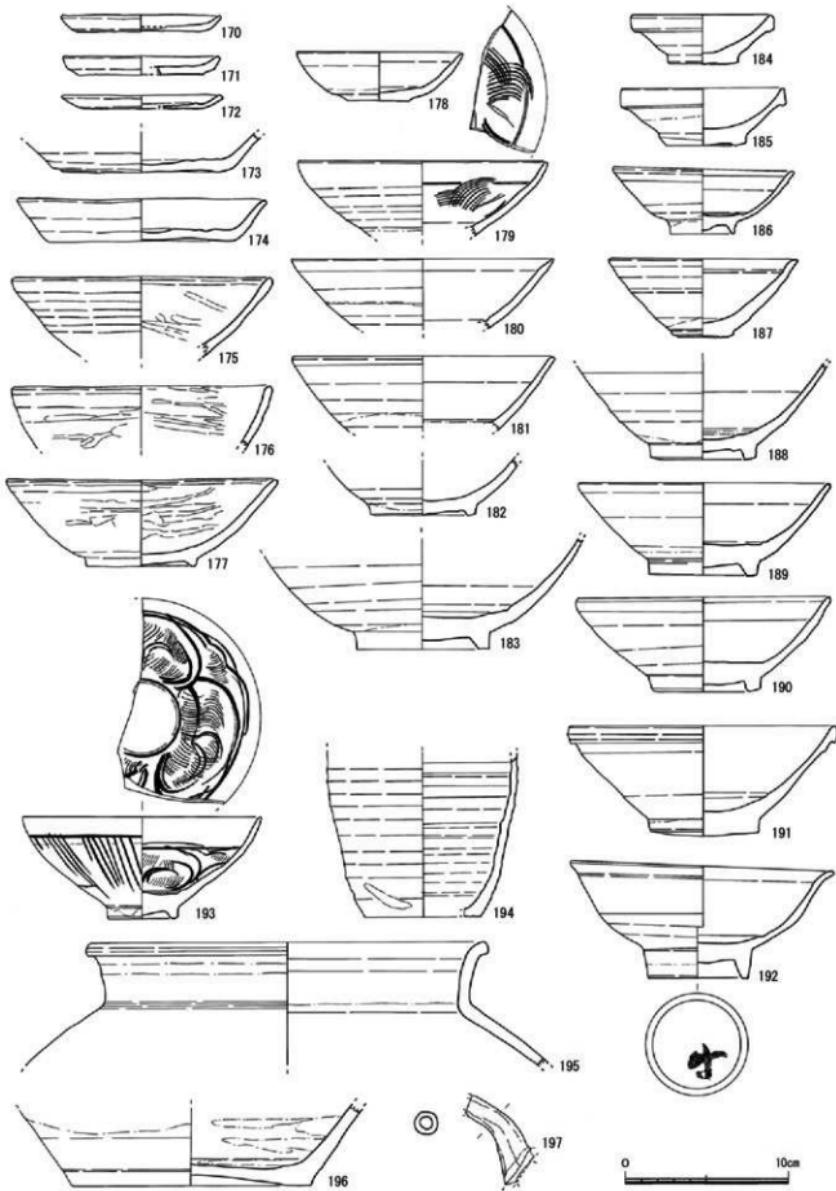
第20図 SK083出土遺物実測図 (1/3)



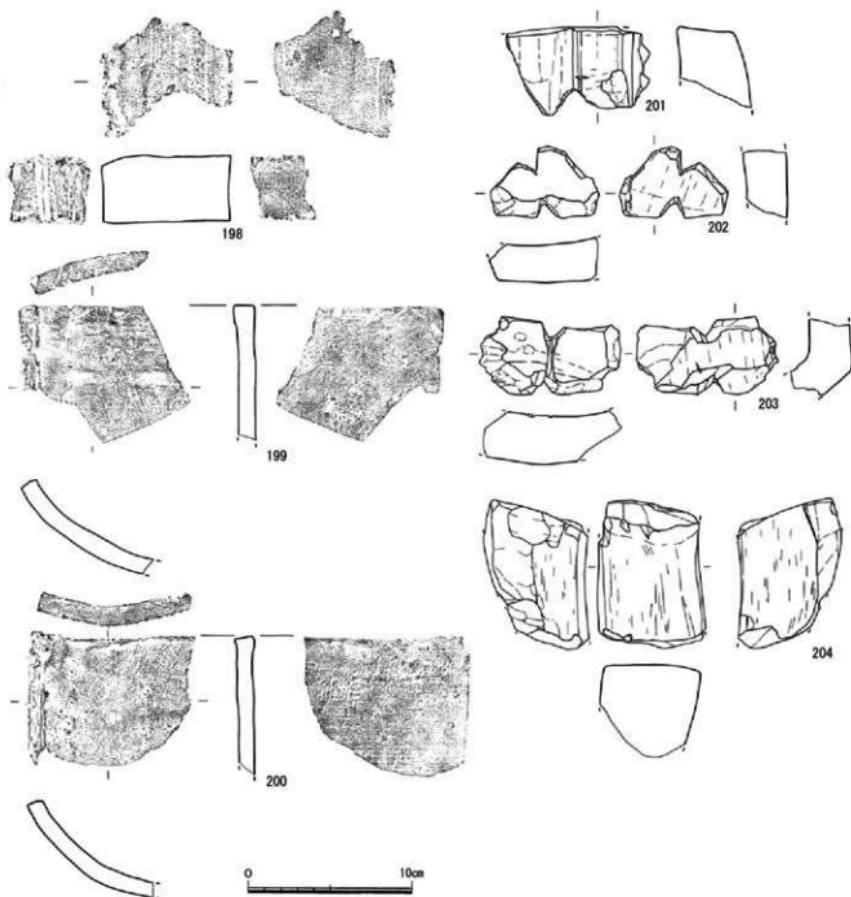
第21図 SK085出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第22・23図)

170～172は土師器皿、173・174は土師器壊、175～177は瓦器挽である。178～186・188～192は白磁である。そのうち178は白磁皿、その他は挽である。192は底部外面に十字状の墨書きが見られる。193は同安蒸系青磁挽で、外面には櫛目文、内面には文様を施す。194は陶器壺の胸部、195は陶器壺の口縁部、196は陶器壺の底部である。197は陶器の水注片である。198は埠、199・200は平瓦、201～203は滑石製石鍋を再加工したものである。204は凝灰岩製の砥石である。



第22図 SK086出土遺物実測図① (1/3)



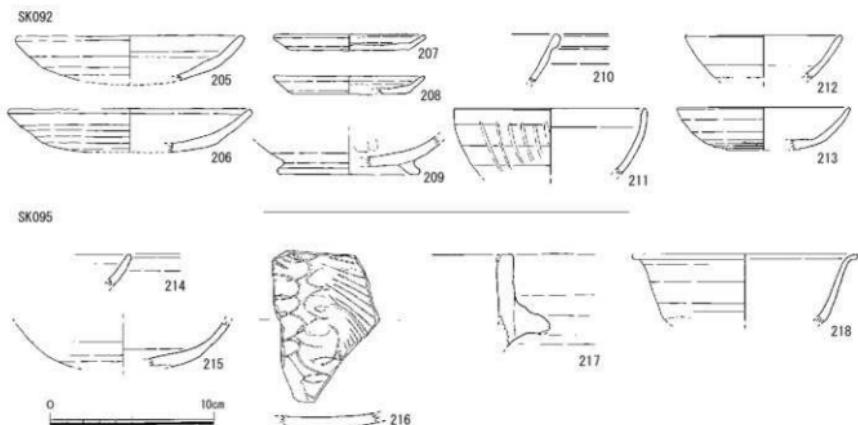
第23図 SK086出土遺物実測図② (1/3)

SK092 (第16図)

SK083の西側で検出した、直径0.8mの円形土坑である。SD082に切られる。深さ80cmで、埋土は暗褐色砂である。土師器、陶磁器、製塙土器等が出土した。

出土遺物 (第24図)

205・206は底部に丸みをもつ土師器坏である。復元口径はそれぞれ14.0cm、14.9cmで、ともに底部と胸部の境に強い稜線を有する。207・208は土師器皿である。ともに底部は回転ヘラ切りで、207は板状压痕が明瞭に残る。209は土師器碗である。210は白磁碗の口縁部片、211は白磁碗で外面に綫方向のヘラ描き文を施す。212・213は白磁皿である。



第24図 SK092・095出土遺物実測図(1/3)

SK095(第16図)

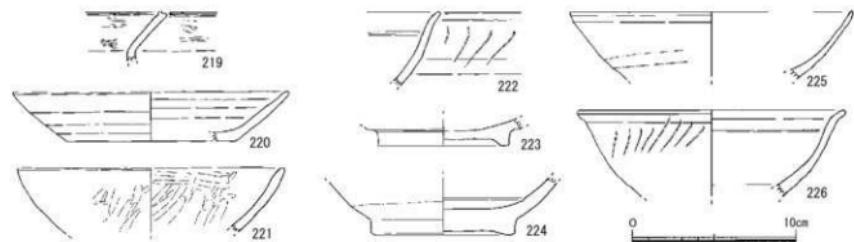
調査区南西端で検出した、径1.8m以上の土坑である。搅乱に切られているうえに調査区外に広がるため、平面形と規模は不明である。深さ1.3mで、埋土は黒灰色砂である。出土遺物は土師器、陶磁器等である。

出土遺物(第24図)

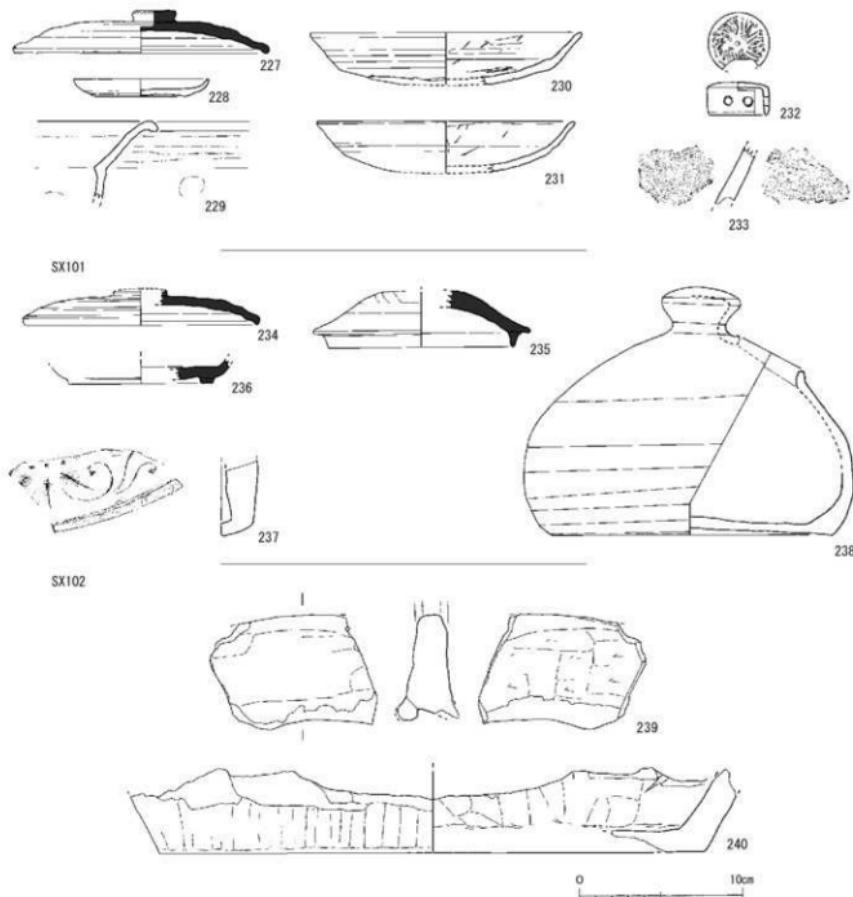
214は古代の土師器環の口縁部、215は土師器環胴部～底部である。216は土師器の皿あるいは高环の破片である。内面は丁寧にナデて暗文状にヘラミガキを施す。217は移動式竈の破片か。218は白磁碗である。復元口径13.8cm。

③ピット出土遺物(第25図)

いずれも1区中央北壁沿いで検出したSP069からの出土である。219は古墳時代前期の土師器甕の口縁部。ハケ調整の後にナデを施している。220は土師器環で、復元口径16.8cm。内外面ともに黒化している。221は瓦器椀で、復元口径16.4cm。222・225・226は白磁椀の口縁部で、222・226は外側に縱方向のヘラ描き文が見られる。223・224は白磁椀の底部である。ともに底部を削り出している。



第25図 SP069出土遺物実測図(1/3)



第 26 図 2面その他の出土遺物実測図 (1/3)

④ その他の遺物 (第 26 図)

227 はつまみを有する須恵器の壺蓋、041 から出土。228 は土師器皿で、復元口径 8.2cm、底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。046 から出土。229 は緑白色釉の陶器盤、045 より出土。230・231 は土師器壺、ともに 051 出土。232 は青白磁の合子蓋で、5mm 程の孔を有する。054 から出土。233 は製塙土器で、内面には布目痕が残る。050 より出土。234～238 は調査区西端の擾乱 101 からの出土。234・235 は須恵器の壺蓋、236 は須恵器の高台付き壺である。237 は近世の軒平瓦。238 は近代以降の陶器で胴部に 5cm 程の孔を有する。239・240 も同じく擾乱 102 からの出土。239 は移動式竈の破片、240 は大型の滑石製石鍋の底部である。復元底部径 33.6cm。

4. 第3面の調査

(1) 概要

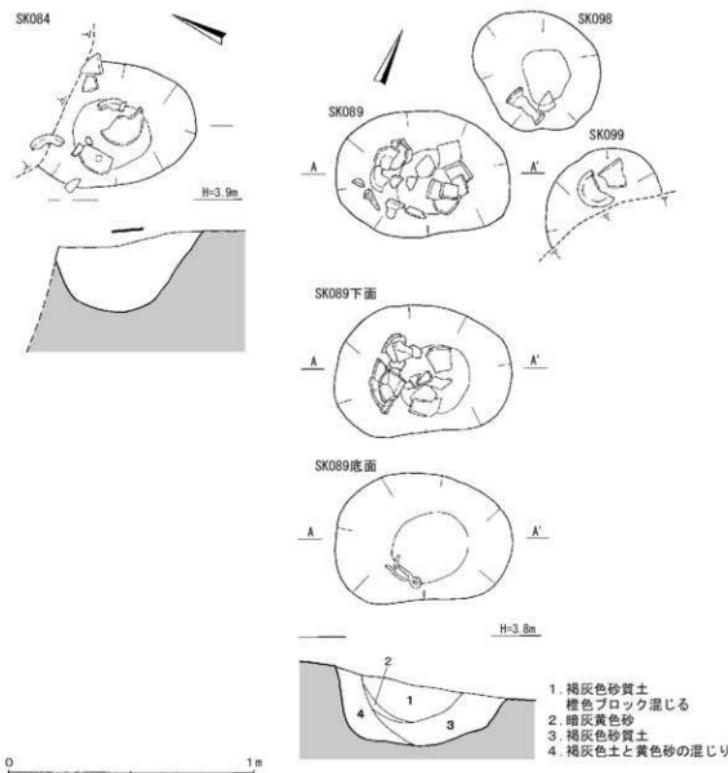
標高 3.8 m 付近の褐色砂を検出面とした。検出した遺構は土坑、ピットである。遺構の密度は濃くはないが、遺物が集中して出土した遺構もある。古代の遺構が主体を占める。

(2) 遺構と遺物

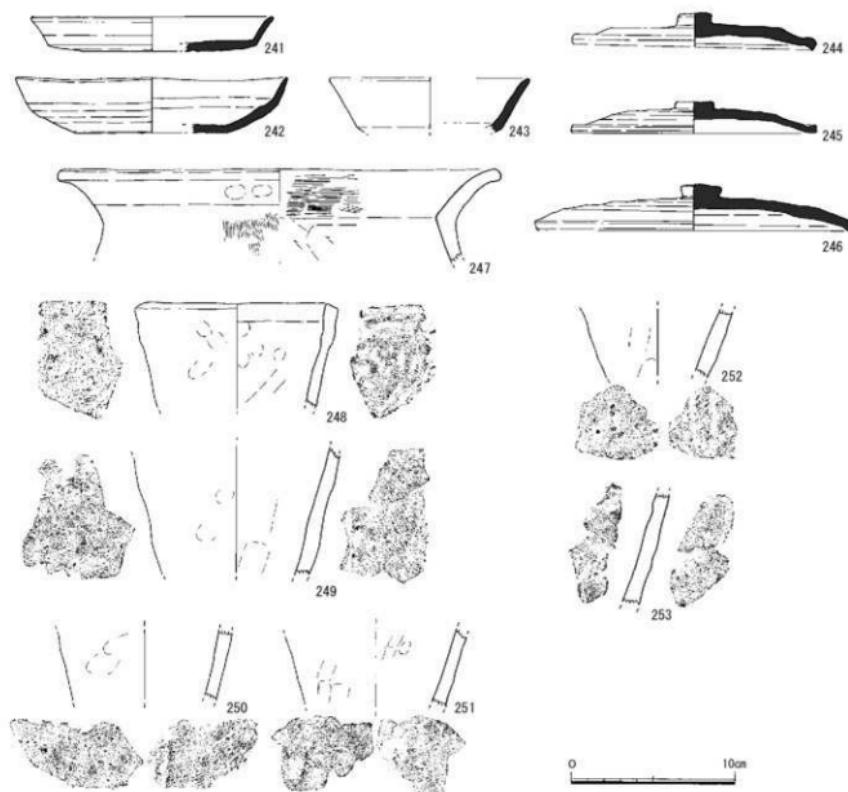
① 土坑 (SK)

SK084 (第 27 図)

2 区の南東部で検出した土坑である。2 面の SK085 に切られる。長軸 0.7 m 以上、短軸 0.5 m、深さ 30cm を測る。埋土は暗褐色砂で、検出面付近に遺物が集中していた。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器等である。



第 27 図 SK084・089・098・099 実測図 (1/20)



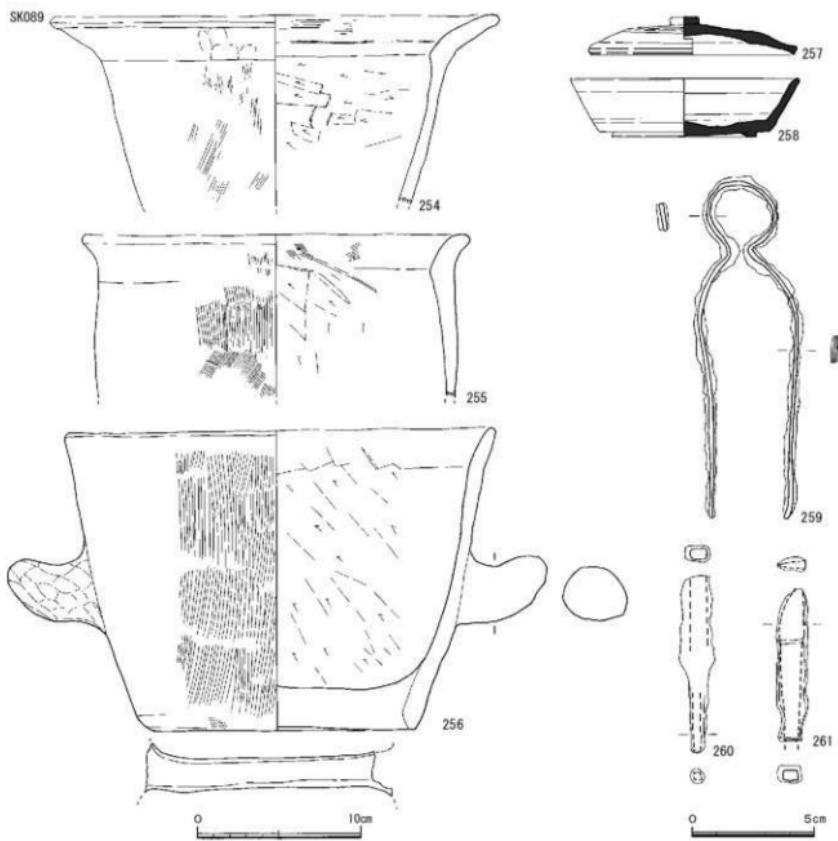
第28図 SK084出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第28図）

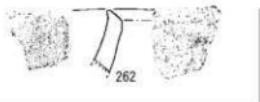
241・242は須恵器の皿、243は須恵器の壺口縁部である。244～246はつまみを有する須恵器の壺蓋である。244は外面に墨書が残る。247は土師器甕である。復元口径27.2cm、外面には縦方向のハケメ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。248～253は製塙土器である。いずれも破片で、内面には細かな布目痕が残るものが多い。

SK089（第27図）

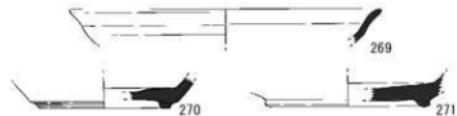
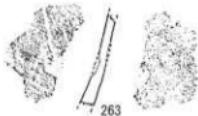
2区中央付近で検出した土坑である。長軸0.7m、短軸0.5m、深さ30cm。埋土は褐灰色～暗灰黄色砂である。検出面付近から多量の遺物が出土し、上面、下面、底面と遺物を取り上げながら掘り下げた。遺物は土師器、須恵器が多量に出土し、接合できる個体が多い。鎌子状鉄製品と刀子も出土している。



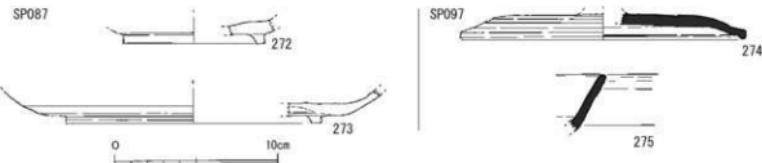
SK098



SK099



第29図 SK089・098・099出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第30図 SP087・097出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第29図)

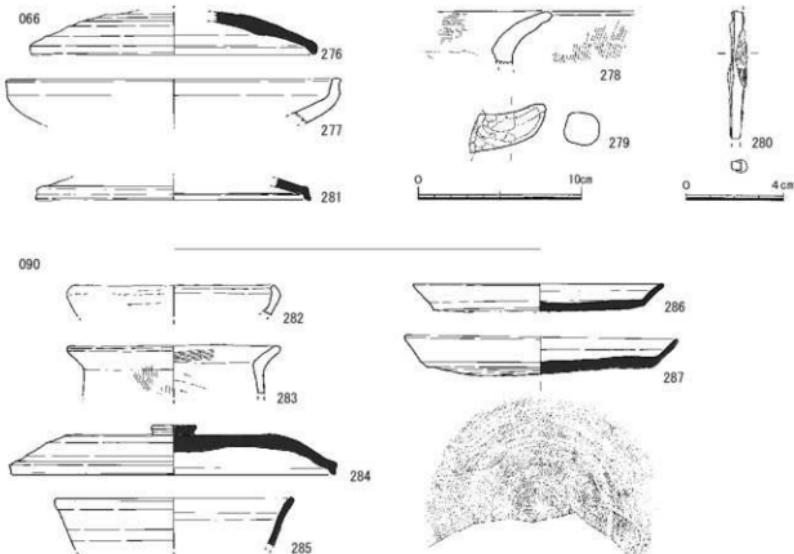
254・255は土器器蓋である。外面には縦方向のハケメ、内面にはケズリを施す。256はほぼ完形の土器器瓶である。口径26.2cm、器高18.4cm。胴部外面には細かな縦方向のハケメ、内面にはケズリを施す。胴部中位に断面円形の把手を有し、底部には断面長方形の棒状粘土を貼り付けて2孔式としている。257は須恵器器蓋、258は高台付きの須恵器器瓶である。259は底面付近から出土した、鏡子状鉄製品である。全長14.0cmで、基部は径3.0cm程度の円形を呈する。断面は幅1.2cm、厚さ2mmの長方形である。260・261は鉄製刀子で、同一個体と思われるが接合しなかった。

SK098 (第27図)

SK089の東側で検出した、ほぼ円形の小型の土坑である。長軸0.55m、短軸0.45m、深さ40cmを測る。埋土は褐灰色砂。遺物は土器類、須恵器が少量出土した。

出土遺物 (第29図)

262は製塙土器である。厚さ1cm程度、内面には細かな布目が残る。



第31図 066・067・090出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SK099 (第 27 図)

SK089 の東側で検出した土坑である。2面の SK085 に切られるため規模は不明だが、およそ 0.5 m 程度の径であろうか。SK089・098 と同様の円形～橢円形を呈すると思われる。遺物は古墳時代～古代の土師器・須恵器等の小片が出土した。

出土遺物 (第 29 図)

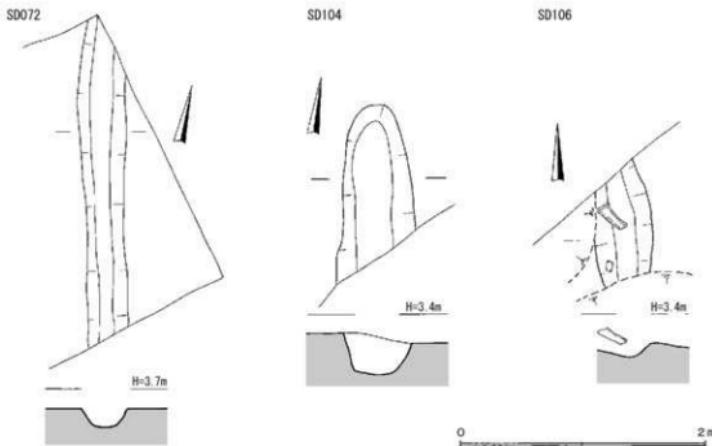
263 は製塙土器で、厚さ 7 mm 程度。内面には細かな布目痕が残る。264～266 は須恵器の坏蓋口縁部の破片である。267・268 は須恵器の高台付き坏の口縁部と思われる。内外面にヨコ方向のナデを施す。269 は須恵器の皿で、復元口径 19.0 cm。270・271 は須恵器坏の高台部である。270 は復元底部径 8.2 cm、271 は復元底部径 10.0 cm。

②ピット出土遺物 (第 30 図)

272 は土師器坏の高台部で、復元底部径 8.6 cm。273 は土師器皿の高台部で、復元底部径 15.6 cm である。SP087 出土。274 は須恵器の坏蓋、275 は高台付きの須恵器坏の口縁部である。ともに SP097 より出土した。

③その他の遺物 (第 31 図)

276～280 は、調査区中央の 067 周辺でまとまった遺物の出土が見られたため、遺構番号 066 として取り上げたものである。276 は須恵器の坏蓋で復元口径 17.6 cm。277 は皿口縁部で、復元口径 20.4 cm。278 は土師器甕の口縁部で、外面には縦方向のハケメ、内面にはヨコ方向のハケメを施す。279 は土師器甕の把手、280 は断面方形の鉄釘で木片が付着している。281 は須恵器坏蓋で、067 より出土した。282～287 は SK089・098・099 周辺を検出した際に出土したもので、遺構番号 090 として取り上げたものである。282 は土師器坏の口縁部か。283 は口縁部が外反する小型の土師器甕である。284 は須恵器の坏蓋で、復元口径 20.0 cm、器高 3.0 cm、つまみを有する。285 は高台付きの須恵器坏で、復元口径 14.6 cm。286・287 は須恵器皿である。286 は口径 15.3 cm、287 は口径 16.1 cm。



第 32 図 SD072・104・106 実測図 (1/40)

5. 第4面の調査

(1) 概要

標高 3.6 ~ 3.4 m 付近の黄色砂丘砂を検出面とした。検出した遺構は溝、土坑、ピットである。遺構の密度は濃くはない。古墳時代～古代の遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

①溝 (SD)

SD072 (第32図)

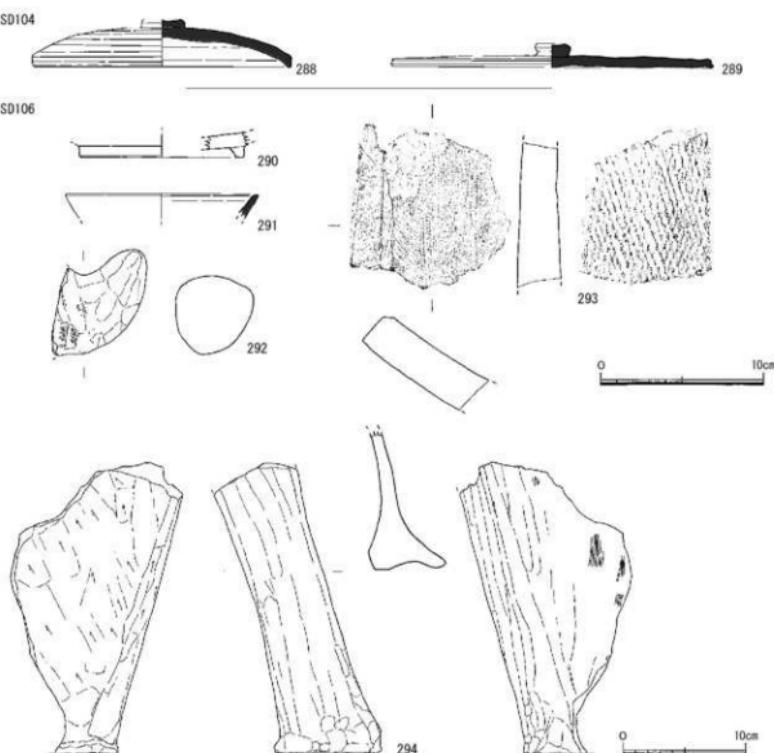
調査区東端で検出した、南北方向の溝状遺構である。幅 40cm、深さ 15cm で、断面はゆるい U字形を呈する。出土遺物は小片のみで図化し得ないが、古代の遺構と思われる。

SD104 (第32図)

2 区中央の南壁沿いで検出した、南北方向の溝状遺構である。長さ 1.4 m 以上、幅 60cm、深さ 30cm で、断面はゆるい U字形。出土遺物は土師器、須恵器等で、古代の遺構と思われる。

出土遺物 (第33図)

288・289 はともに須恵器の坏蓋である。288 は口径 15.8cm、高さ 2.9cm。289 は復元口径 17.6cm、ほぼ扁平な器形で高さ 1.5cm を測る。



第33図 SD104・106出土遺物実測図 (1/3・1/4)

SD106 (第32図)

調査区北西端で検出した南北方向の溝状遺構である。擾乱と3面SK095に切られ、部分的な遺存である。幅40cm、深さ15cm程度。出土遺物は土師器、須恵器等で、古代の遺構と思われる。

出土遺物（第33図）

290は土師器壺の高台部、291は須恵器壺の口縁部、292は土師器の把手である。293は平瓦の破片で、厚さ2.5cm。外面には繩目の叩き痕が、内面には布目痕が残る。出土位置が不明瞭で、重複するSK095出土の可能性がある。294は移動式竈の裾部の破片である。

②土坑（SK）

SK071

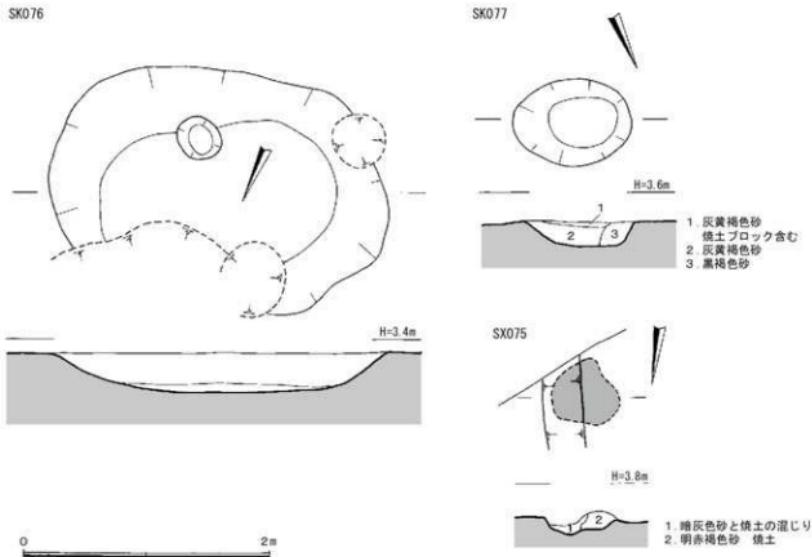
1区中央で検出した土坑であるが、1面SK027や2面SP069に切られて部分的な遺存で規模は不明である。時期は判然としないが、古墳時代の土師器が出土している。

出土遺物（第35図）

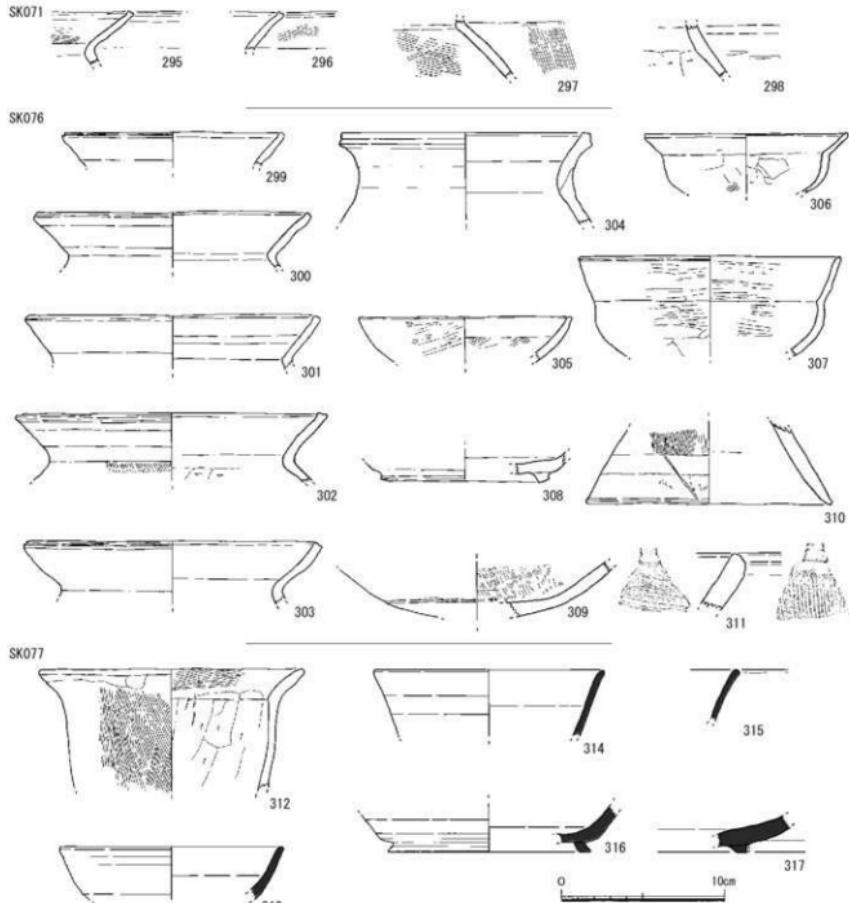
295は古墳時代土師器の甕口縁部である。口縁部はやや湾曲し、内面の頸部以下はケズリを施す。口縁部内外面はナデ調整。296も土師器甕の口縁部。297・298は土師器甕の頸部～胴部の破片である。297は外面に細かなハケメが残る。

SK076（第34図）

1区中央で検出した不整形の土坑である。SK071に切られる。長軸2.8m、短軸2.0m、深さ35cm。底面からの立ち上がりは緩やかで、埋土は褐色砂である。底面でピットを検出したが、上面から掘り込まれたものの可能性もある。出土遺物は土師器が主で、古墳時代の遺構と思われる。



第34図 SK076・077、SX075 実測図 (1/40)



第35図 SK071・076・077出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第35図）

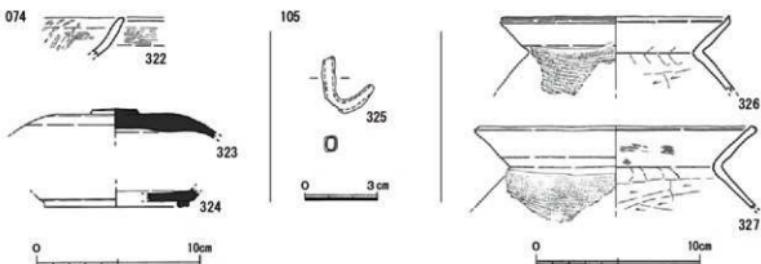
299～304は土師器甕の口縁部である。口縁部はやや湾曲するものから直線的なものも見られる。305は楕円形の土師器壺口縁部である。306・307は鉢形の土師器で、胴部は丸みをもち、口縁は外側に広がる。308は土師器壺の高台部で混入の可能性もある。309は土師器高杯の壺部で、口縁を欠く。内面には細かなハケメを施す。310は脚部の破片。311は陶器鉢の口縁で、混入と思われる。

SK077（第34図）

SK076の西側で検出した、楕円形の土坑である。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。埋土には焼土ブロックが多く含まれていた。出土遺物は土師器、須恵器で、古代の遺構と思われる。



第36図 SX075 出土遺物実測図 (1/3)



第37図 074、105、その他の出土遺物実測図 (1/2・1/3)

出土遺物（第35図）

312は土師器甕である。復元口径 16.2cm。直線的な胴部から口縁が外反する。胴部外面には縦方向のハケメ、内面には縦方向のケズリを施す。313～315は須恵器の高台付き壺の口縁部である。316は土師器、317は須恵器の高台付き壺である。

③不明遺構 (SX)

SX075（第34図）

調査区南東端で検出した焼土である。SD072に切られる。約 60cm の範囲に広がる。古代の所産と思われる。

出土遺物（第36図）

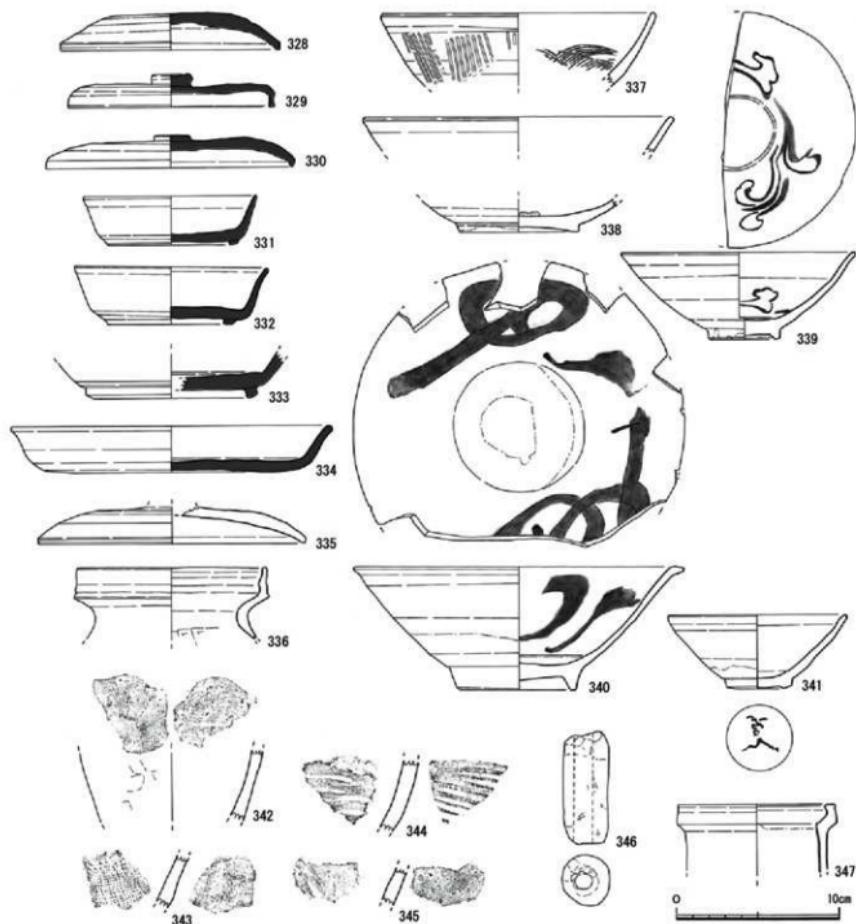
318は土師器壺の口縁部、319は須恵器壺の口縁部片。320は須恵器の口縁部片、321は須恵器壺の高台部である。

④その他の遺物（第37図）

322～324はSX075周辺の褐色砂からの出土で、遺構番号 074として取り上げた。322は土師器壺の口縁、323は須恵器壺蓋、324は高台付きの須恵器壺である。325は鉄釘で先端が曲がる。SP105より出土。326・327は1区4面検出時に出土した古墳時代前期の土師器甕である。326は復元口径 14.0cm、327は復元口径 17.2cm。

6. その他の出土遺物

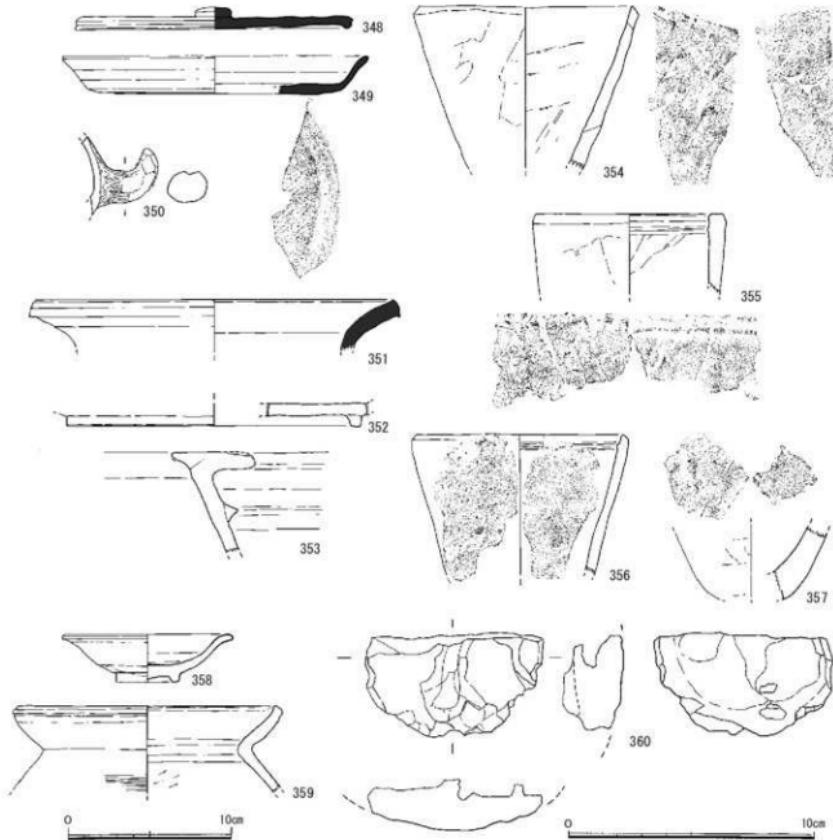
第38図は、第2面から第3面への掘り下げ時の出土遺物である。328～330は須恵器の壺蓋で、それぞれツマミの有無や器形が異なる。331～333は高台付きの須恵器壺である。334は須恵器の皿で、復元口径 19.6cm、器高 2.8cm。335は土師器の蓋か。336は古墳時代の土師器壺口縁部。337～339は青磁碗で、338は越州窯系青磁。340は白磁碗である。内面には施文し、見込みの釉を輪状に搔き取っている。341はほぼ完形の天目碗で、底部外面に墨書が見られる。「夏」であろうか。342～345は製塙土器の破片である。346は土鍤で、長さ 6.9cm、幅 2.8cm。347は陶器の壺あるいは水注か。



第38図 その他の出土遺物実測図① (1/3)

第39図348～357は、第3面から第4面への掘り下げ時の出土遺物である。348は須恵器の壺蓋で、口径16.9cm、器高1.3cm。349は須恵器の皿で、復元口径18.6cm、器高2.3cm。350は土師器の把手、351は須恵器の甕口縁部。352は土師器の壺あるいは皿の高台部で、復元底部径18.0cm。353は弥生時代中期の甕口縁部である。本調査での数少ない弥生時代の遺物である。354～357は製塙土器で、内面には布目痕が残る。

358・359は1区より出土。358は白磁皿で、復元口径10.4cm、器高2.9cm。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。359は古墳時代前期の土師器甕。360は楕円形甕で、2区掘り下げ時に出土した。



第39図 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)

7.まとめ

今回の調査では計4面の調査を行ったが、隣接する第222次調査と同じく、中世前半、古代、古墳時代前期の3時期を中心とする遺構が検出された。中世前半の土坑からは土師器・陶磁器が大量に出土し、「張」や「綱」といった中国商人に関係する墨書き土器が多数含まれていた。古代の土坑からは土師器・須恵器・製塙土器がまとめて出土したほか、刀子や鏃子状鉄製品も出土した。本地点周辺は古代の官衙城に想定されており、第222次調査では円面鏡が出土する等、関連が注目される。古墳時代の遺構は少ないが、古式土師器は各面から出土しており、集落が存在したことが窺われる。そのほか、中世のガラス製品や、椀形甌や流動甌といった鍛冶関連遺物も出土した。限られた範囲の調査であったが、多くの資料を得ることができた。



1. 1区1面全景（北より）



2. 1区2面全景（北より）



3. 1区3面全景（北より）



4. 1区4面全景（北より）



5. 2区2面全景（南より）



6. 2区3面全景（南より）

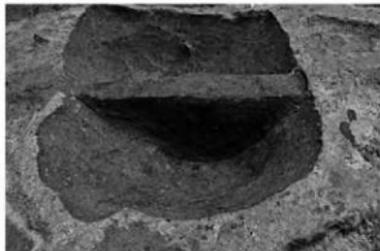


7. 2区4面全景（南より）

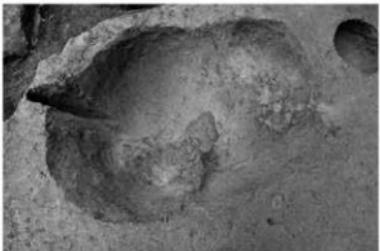


8. 1区南壁土層（北より）

図版2



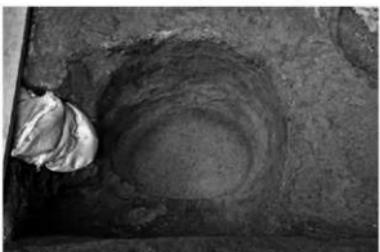
1. SK022 土層（北より）



2. SK028 完掘状況（西より）



3. SD082 土層（南より）



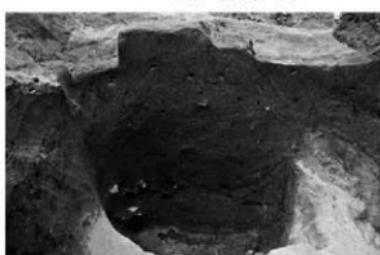
4. SK053 完掘状況（西より）



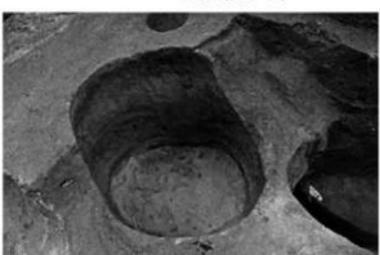
5. SK056 土層（北西より）



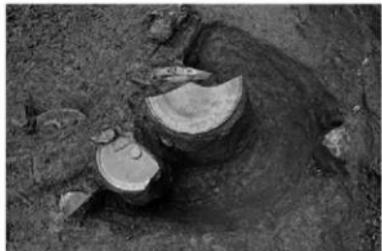
6. SK083 土層（南より）



7. SK086 土層（西より）



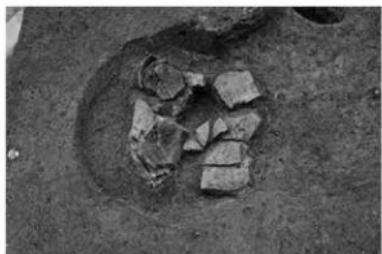
8. SK092 完掘状況（南東より）



1. SK084 遺物出土状況（西より）



2. SK089 遺物出土状況①（南より）



3. SK089 遺物出土状況②（南より）



4. SK089 鉄器出土状況（東より）



5. SK089 土層（南より）



6. SD104 遺物出土状況（北より）



7. SK077 土層（東より）



8. SX075 土層（北より）

図版4



出土遺物

IV 第 236 次調査の記録

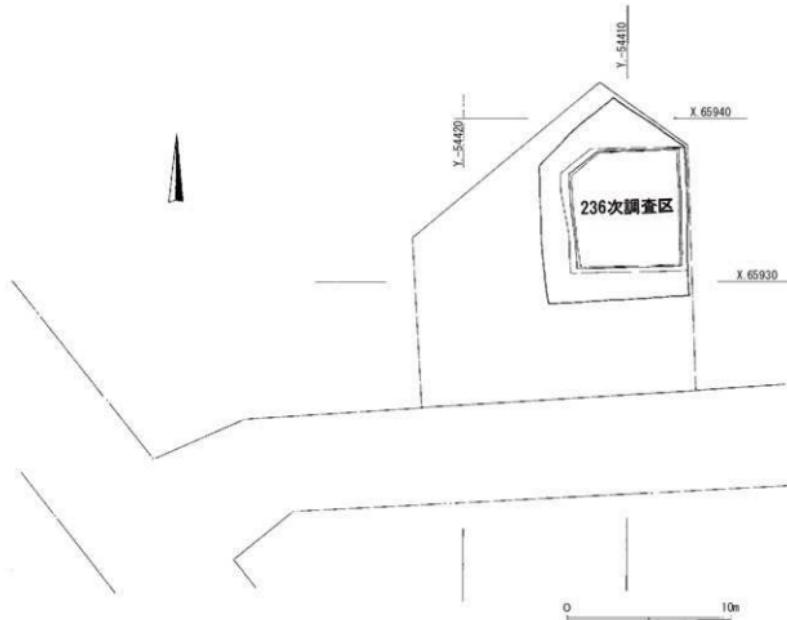
1. 調査の概要

第 236 次調査地点は、第 235 次調査地点の南東約 30 m に位置する。北側には第 7 次地点と第 175 次地点、西には第 170 次地点、東には第 27 次地点がある。

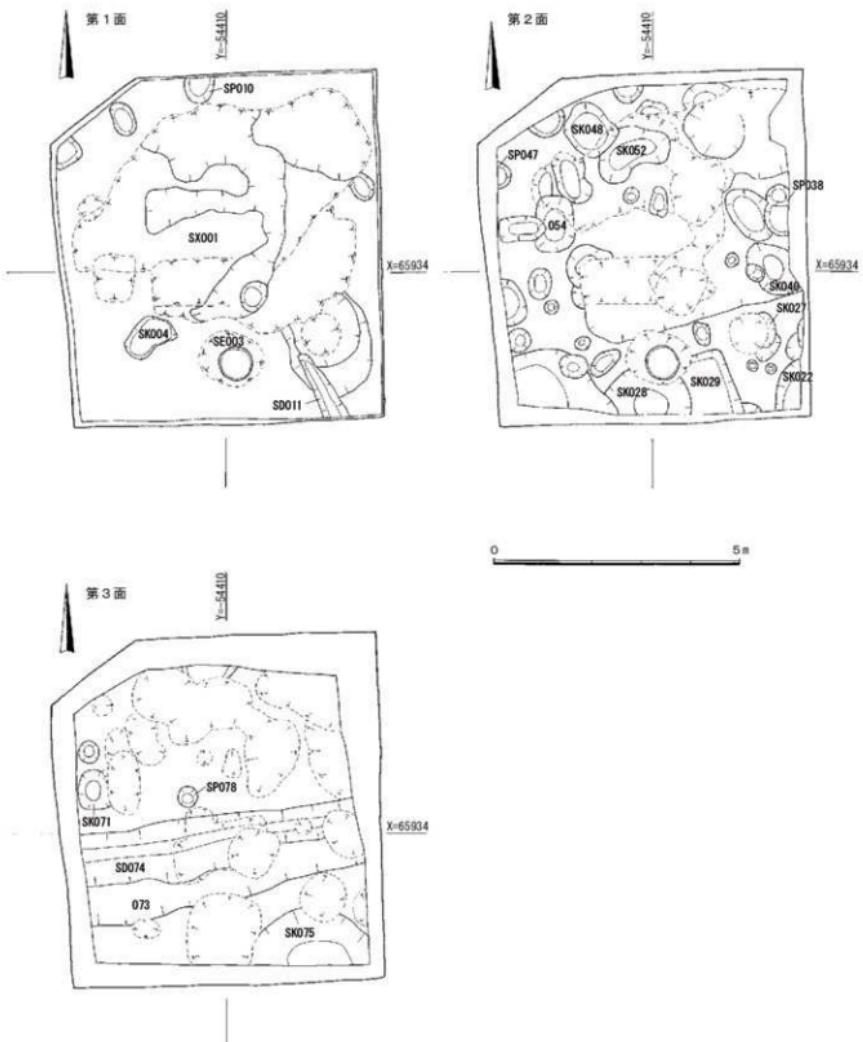
第 235 次調査終了後、継続して調査に取り掛かった。令和元年 9 月 26 日より調査区北側及び東側のみ土留め設置を行い、9 月 27 日より表土剥ぎを開始した。表土剥ぎ時の堆土は場外へ搬出し、以降の堆土は場内内で処理することとした。計 3 面の調査を行い、11 月 8 日に埋め戻し、11 月 12 日に器材を撤収して発掘調査を完了した。

調査前は舗装敷きの駐車場で、標高 5.9 m 前後であった。第 40 図に調査区南壁と西壁の土層図を示した。客土を除去した 4.8 m 付近の暗褐色土を第 1 面、暗褐色土を除去した 4.4 m 付近を第 2 面、4.0 m 付近の黄色砂丘砂を第 3 面とした。第 1 面は近世、第 2 面は中世、第 3 面は古墳時代～古代を主とすると考えている。

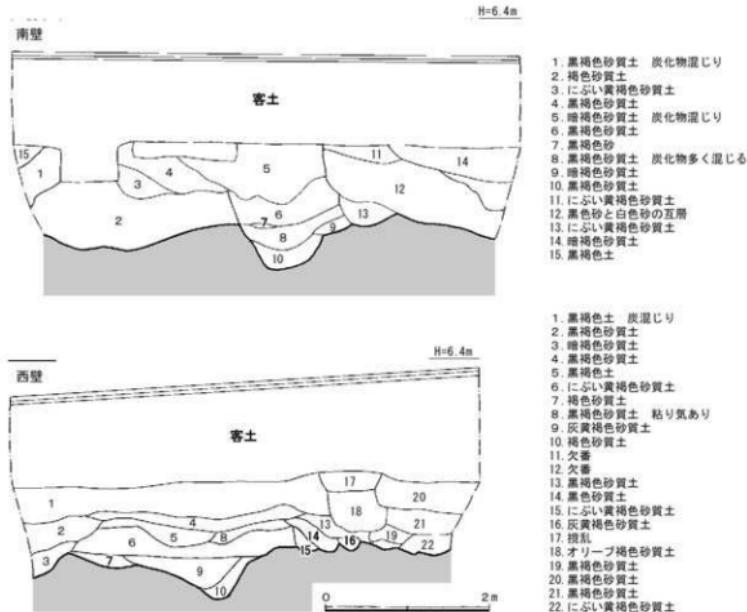
検出した遺構は、古墳時代・古代～近世の溝、土坑、ピット等である。出土遺物は古墳時代の土師器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・陶磁器、鉄器、ガラス製品等で、コンテナケース 25 箱分である。



第 40 図 第 236 次調査区位置図 (1/300)



第41図 調査区全体図 (1/100)



第42図 調査区土層実測図 (1/60)

2. 第1面の調査

(1) 概要

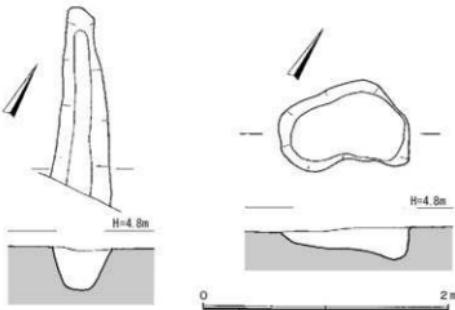
客土除去後の標高 4.8 m ~ 4.6 m 付近の暗褐色土を検出面とした。調査区中央部分は SX001 とした大きな攪乱を受けており、その周囲で遺構検出を行った。検出した遺構は溝、土坑、ピットと搅乱や近現代の井戸で、近世以降の所産である。

(2) 遺構と遺物

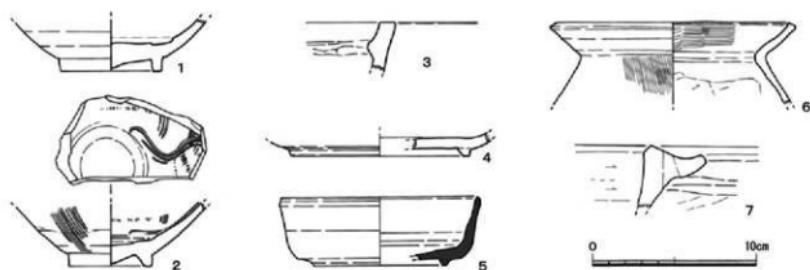
①溝 (SD)

SD011 (第43図)

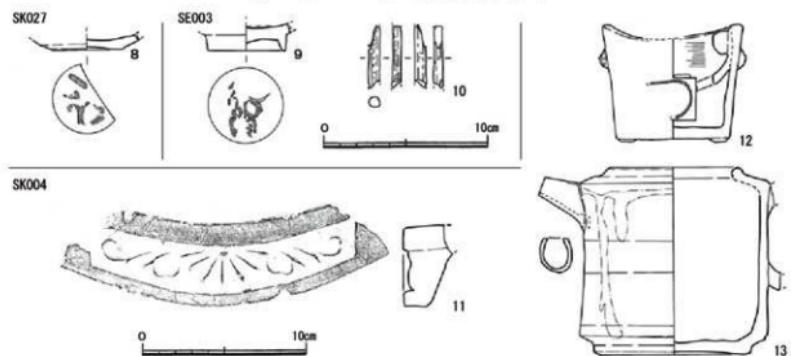
調査区南東端で検出した、南北方向の溝状遺構である。長さ 1.6 m 以上、幅 40cm、深さ 30cm で、断面は緩いU字形を呈する。埋土は灰褐色砂。古墳時代・古代・中世の遺物が出土したが、近世の遺構と思われる。



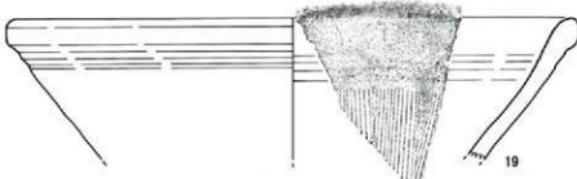
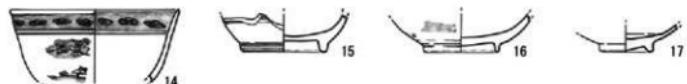
第43図 SD011・SK004 実測図 (1/40)



第44図 SD011出土遺物実測図 (1/3)



第45図 SE003・SK004出土遺物実測図 (1/3)



第46図 SP010出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第44図）

1は白磁椀の底部で、内面の釉を輪状に掻き取っている。2は同安窯系青磁椀で、内外面に文様を施す。3は陶器鉢の口縁部。4は古代の土師器坏、5は古代の須恵器坏である。6は古墳時代前期の土師器甕、7は土師質の鍋か。

②土坑（SK）

SK004（第43図）

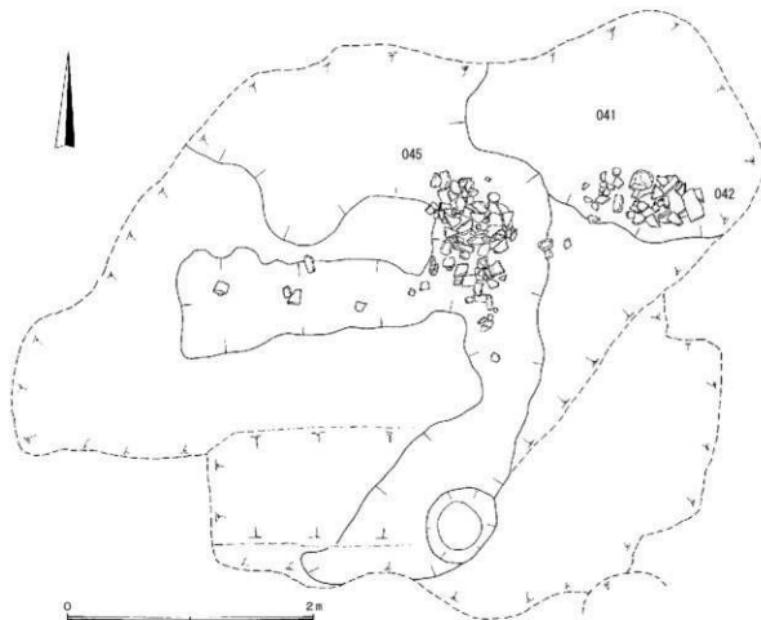
調査区南西部で検出した、長軸1.1m、短軸0.6mの土坑である。埋土には多量の炭が混じっていた。近世以降の所産と思われる。

出土遺物（第45図）

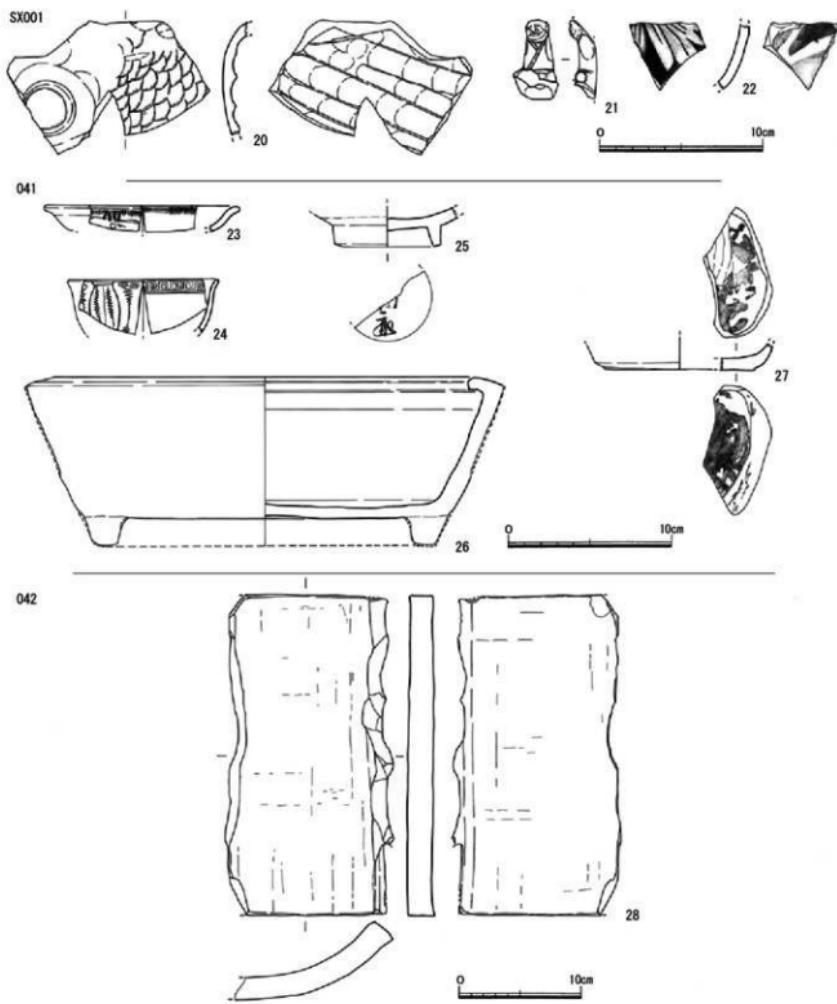
11は近世の軒平瓦。12は香炉状の陶器。13は褐釉の陶器急須である。持ち手を欠くがほぼ完形である。器高11.4cm。

③他の出土遺物（第45・46図）

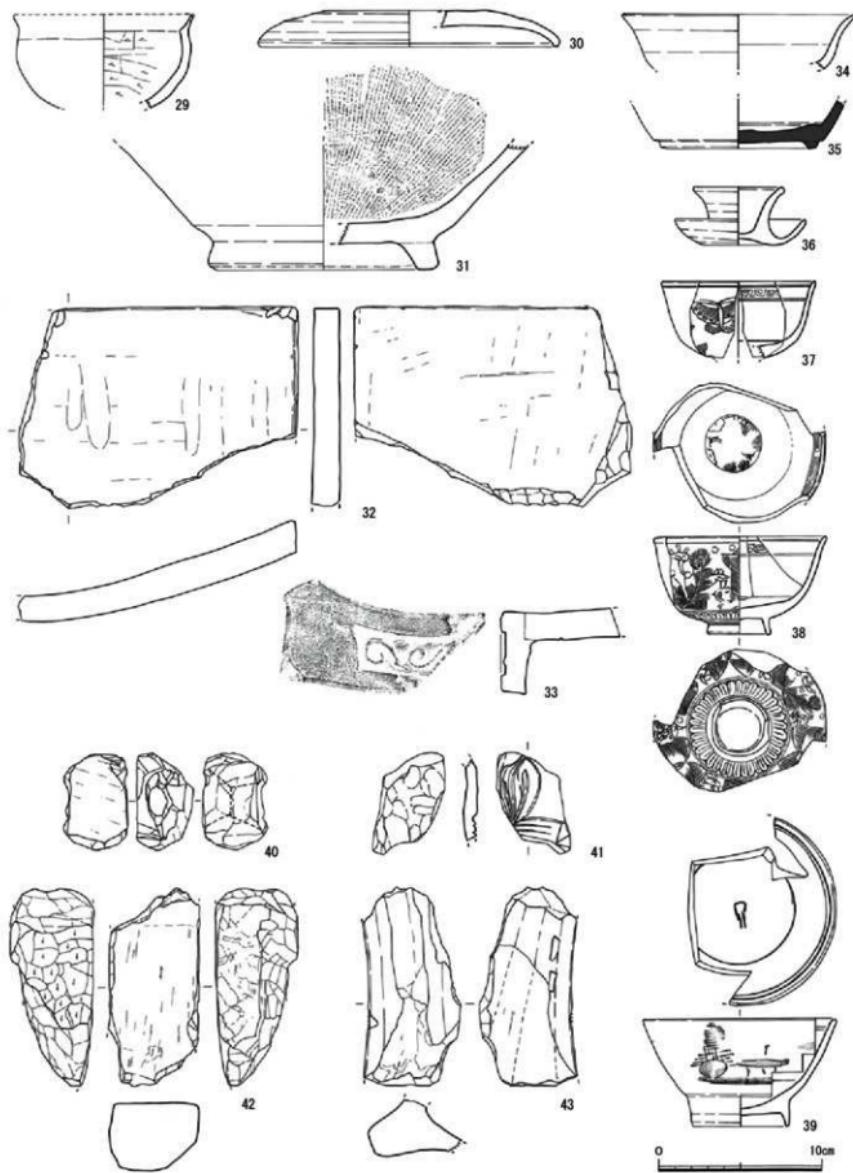
8～10は近代井戸SE003の掘方より出土した。8は白磁皿の底部、9は白磁椀の底部で、ともに底部外面に墨書があるが、判然としない。10は滑石製の棒状製品である。長さ3.8cm、幅7mm。14～19は調査区北壁沿いのSP010からの出土である。14～16は染付椀、17は陶器の椀、18は瓦質火舎で、復元口径33.8cm。19は陶器擂鉢で、復元口径35.0cm。



第47図 SX001 実測図（1/40）



第48図 SX001出土遺物実測図① (1/3・1/4)



第49図 SX001出土遺物実測図② (1/3)

④不明遺構 (SX)

SX001 (第 47 図)

調査区中央で検出した擾乱（廃棄土坑）で、南北約 4.5 m、東西約 5.5 m の範囲に広がる。埋土は黒灰色砂で、検出面では多量の炭が混じっていた。底面には起伏があるが、深い部分では検出面より約 80cm あり、砂丘面まで到達している。瓦・土器が集中する箇所がいくつもあり、北東端を遺構番号 041、東端を 042、中央付近と南端の窪みを 045 として遺物を取り上げた。南端の 045 付近では壁面が黄褐色に変色して硬化していた。出土遺物は土師器、須恵器、中世陶磁、近世陶磁、大量の瓦、素焼き人形片等である。

出土遺物 (第 48・49 図)

20 は魚をモチーフにした素焼き土製品である。外面は目玉と鱗が表現され、内面には指あるいは工具による平行した溝状の痕跡が残る。21 は土製人形で顔面を欠く。22 は陶器の瓶か。23～27 は、遺構番号 041 とした、SX001 北東部分の遺物集中部から出土したものである。23 は染付の皿で、24 は染付の椀である。25 は白磁碗で、底部外面に花押の墨書きが見られる。26 は瓦質の火舎である。復元口径 29.2cm、器高 10.3cm。27 は土師器壺で、内外面に多量の炭が付着している。28 は遺構番号 042 から出土した棊瓦である。

29～43 は、遺構番号 045 とした SX001 中央付近と南端の窪みから出土した。29 は古墳時代の土師器丸底壺である。内面には横方向のケズリを施す。30 は土師器の壺蓋で、復元口径 18.4cm。31 は陶器擂鉢。復元底部径 14.0cm、残存器高 7.5cm。32 は平瓦、33 は軒平瓦である。34 は須恵器壺で、底部を欠く。復元口径 14.2cm、口縁部は外側に開く。35 は高台付きの須恵器壺である。36 は灯火具か。37～39 は染付の椀である。37 は外面に蝶が、口縁内面には雷文が描かれる。40 は滑石製品。石鍋の把手部分の再加工品か。41 は土製素焼き人形の破片である。図の天地が心許ないが、帯の結び目付近であろうか。42 は花崗岩製の砥石である。残存長 12.0cm、幅 5.5cm。43 は移動式カマドの裾部の破片である。

3. 第 2 面の調査

(1) 概要

第 1 面の暗褐色土を除去した、標高 4.4 m 付近を検出面とした。調査区中央は第 1 面 SX001 により砂丘面まで掘り下げられている。検出した遺構は土坑、ピットである。遺構の密度は濃くはないが、遺物が集中して出土したものもある。中世前半の遺構が主体を占めると考えている。

(2) 遺構と遺物

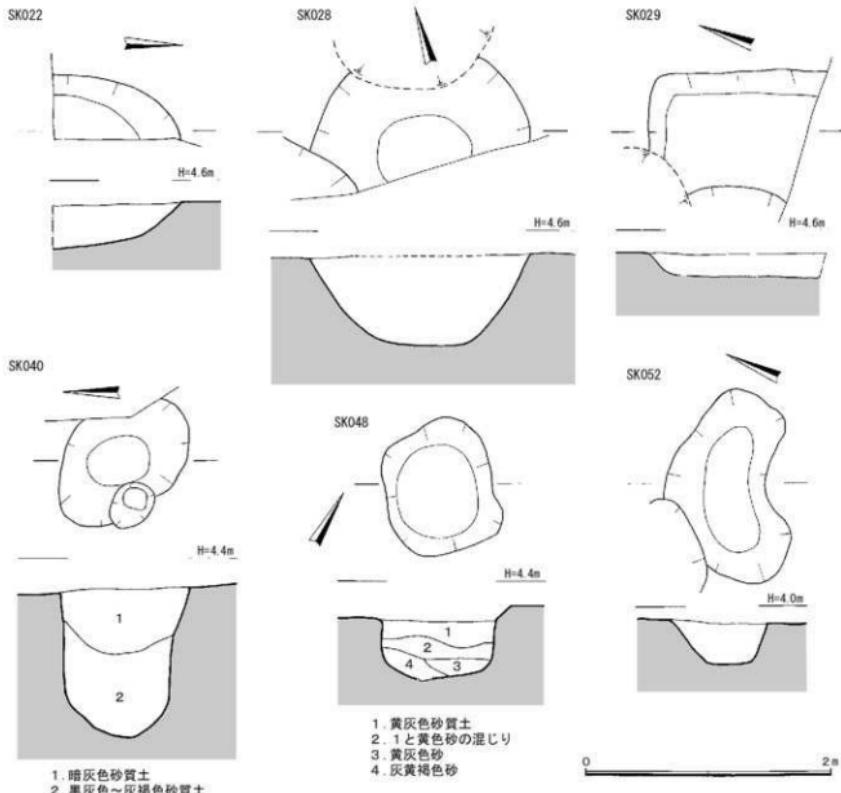
①土坑 (SK)

SK022 (第 50 図)

調査区南東端で検出した土坑である。長軸 1.0 m 以上、短軸 0.5 m 以上、調査区外に広がるため平面形と規模は不明である。埋土は黒灰色砂で、深さ 35cm を測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。出土遺物は土師器、白磁、ガラス小玉等である。

出土遺物 (第 51 図)

44 は古墳時代前期の土師器甌、45 は土師器皿で復元口径 9.0cm。46 は土師器壺で、復元口径 17.4cm。内外面にヘラミガキを施す。47 は白磁皿の口縁部、48 は白磁碗の口縁部である。49 は青色のガラス小玉である。径 7mm、高さ 4mm。第 V 章保存科学分析の報告も参照されたい。



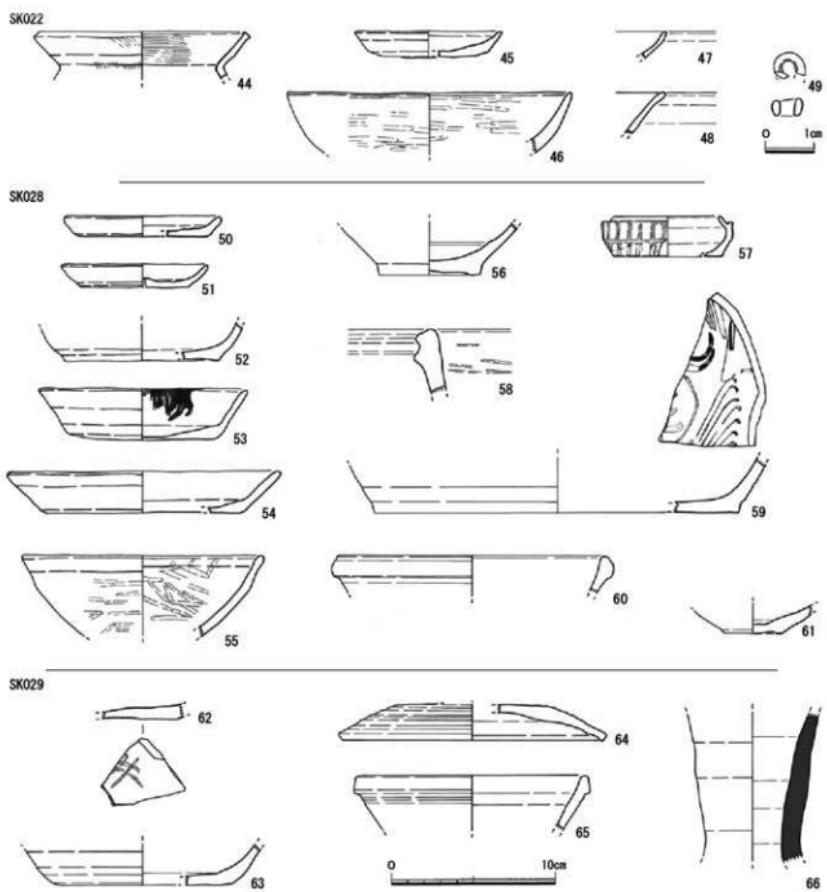
第50図 SK022・028・029・040・048・052 実測図 (1/40)

SK028 (第50図)

調査区南壁沿いの中央付近で検出した円形土坑である。近代井戸SE003に切られる。径およそ1.8m、深さ70cmで、埋土は黒褐色砂。出土遺物は土師器、陶磁器等である。

出土遺物 (第51図)

50・51は土師器皿である。50の底部は回転糸切り、51の底部は不明瞭だが板状圧痕が残る。52～54は土師器壺で、ともに底部は回転糸切りである。53は口縁部に煤が付着し、底部には2cm程度の穿孔がある。55は瓦器椀である。復元口径14.8cm、内外面にヘラミガキを施す。56は白磁椀の底部で、復元底部径6.4cm、残存器高3.2cm。57は青白磁の合子である。58は陶器鉢の口縁部。59は灰オリーブ色釉の陶器盤である。復元底径22.2cm、内面には文様が描かれている。60は玉縁状口縁の白磁椀、61は高麗青磁椀の底部である。



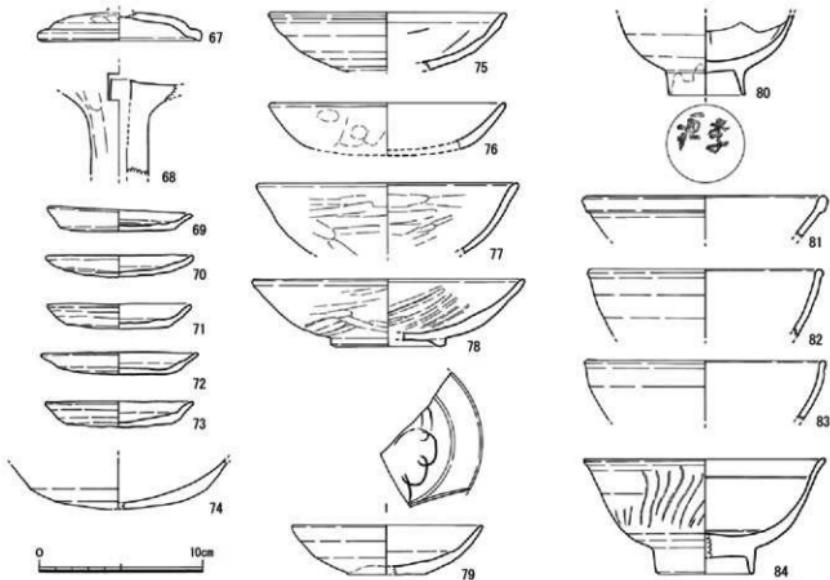
第51図 SK022・028・029出土遺物実測図 (1/1・1/3)

SK029 (第50図)

調査区南壁沿い、SK028の東側に位置する。方形の土坑と思われるが、SE003とSK028に切られしており、平面形や規模は不明である。深さ20cmで、埋土は暗褐色砂である。底面は平坦で、当初は古墳時代の竪穴住居を想定したが、出土遺物は中世のものであった。遺物は土師器、須恵器、陶磁器等が出土した。

出土遺物（第51図）

62・63は土師器環の底部で、62は外面に炭が付着しているが判然としない。64は須恵器の环蓋、65は玉縁状口縁の白磁碗。66は須恵器壺の頸部か。



第 52 図 SK040 出土遺物実測図 (1/3)

SK040 (第 50 図)

調査区東壁沿い中央付近で検出した、横円形の土坑である。長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 1.2 m を測る。埋土は上半が暗褐色砂質土、下半が黒灰色砂質土である。遺物は土師器、須恵器、陶磁器等が出土した。

出土遺物 (第 52 図)

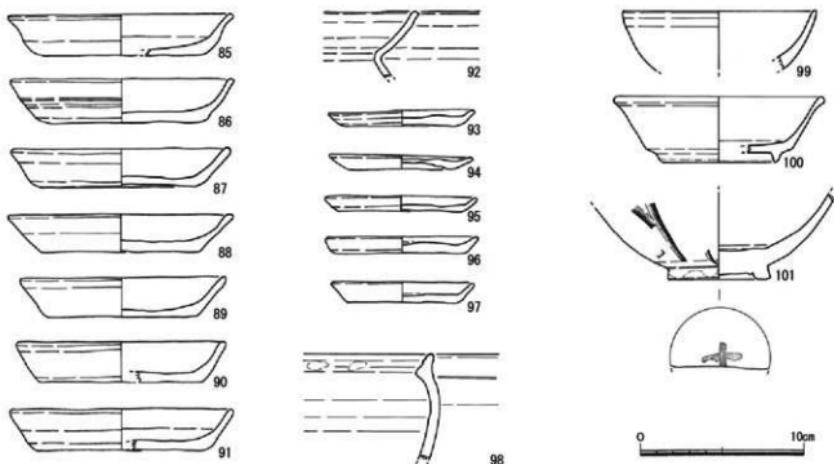
67 は土師器の蓋か。68 は土師器高杯の脚部で、中央に径 1.2cm の孔が貫通している。69 ~ 73 は土師器皿で、底部はいずれもヘラ切りである。74 ~ 76 は土師器杯で、いずれも底部は丸みを帯びている。77・78 は瓦器碗で、内外面ともに丁寧な研磨を施す。79 は白磁皿で、内面見込みに文様を施す。80 は白磁小椀で、高い高台部をもつ。底部外面には「李○」の墨書が見られる。81 ~ 84 は白磁椀である。81 は玉縁状口縁、84 は胴部外面にヘラ描き文を施す。

SK048 (第 50 図)

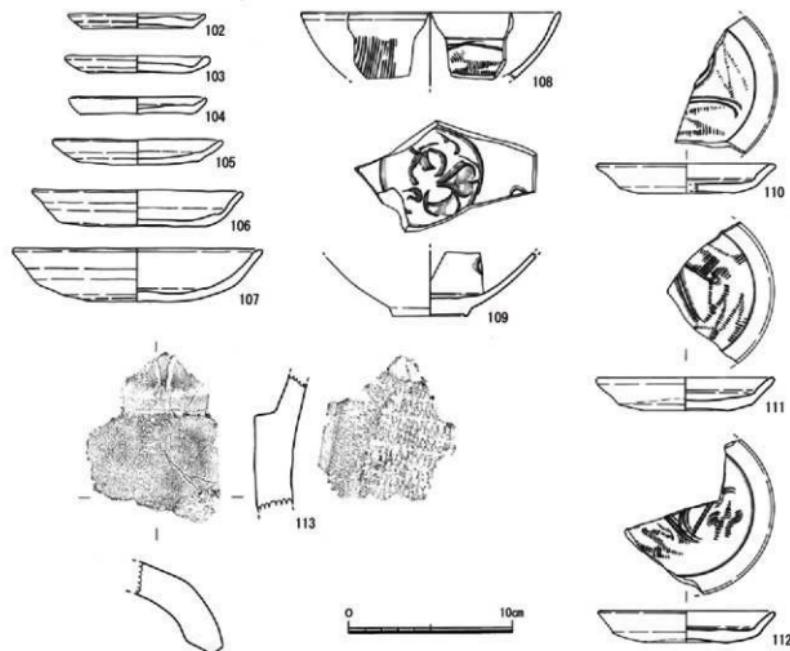
調査区北西端付近で検出した、方形気味の土坑である。長軸 1.0 m、短軸 0.9 m、深さ 30cm を測る。埋土は黄灰色～灰黄褐色砂。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器等である。

出土遺物 (第 53 図)

85 ~ 91 は土師器杯で、底部は全て回転糸切り調整である。93 ~ 97 は土師器皿で、いずれも底部調整は回転糸切りで板状圧痕が残る。98 は陶器鉢の口縁部。暗赤灰色釉で、口縁部内面には目跡が残る。99 は青磁椀、100 は龍泉窯系の青磁椀か。101 は青磁椀で、底部外面に十文字状の墨書が見られる。92 は古墳時代前期の土師器甕の口縁部である。



第 53 図 SK048 出土遺物実測図 (1/3)



第 54 図 SK050 出土遺物実測図 (1/3)

SK050

調査区中央付近で検出した土坑である。第1面のSX001に切られるため、平面形、規模ともに不明であるが、遺物が集中して出土した。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦等である。

出土遺物（第54図）

102～105は土師器皿で、102～104の底部調整は回転糸切りで板状圧痕が残る。105は回転ヘラ切り。106・107は土師器壺で、106の底部調整は回転糸切り、107はヘラ切りである。108は同安窯系の青磁碗で、外側には縦の櫛目文、内側には櫛描文を施す。109は青磁碗で、高台部はわずかに削り出すのみである。110～112は同安窯系の青磁皿で、内側に櫛描文を施す。112は底部外面に墨書きが見られる。113は丸瓦で、内側には粗い布目痕が残る。

SK052（第50図）

調査区北半の中央付近、SX001の底面で検出した。長軸1.6m、短軸0.8mの不整形土坑である。深さは40cmで、埋土は黒灰色砂である。出土遺物は土師器、陶磁器等である。

出土遺物（第55図）

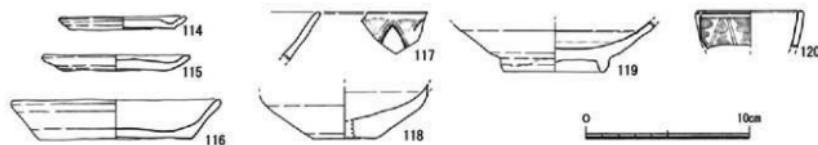
114・115は土師器で、底部は回転糸切り調整である。116は土師器壺で、底部は回転糸切り。117は龍泉窯系青磁碗で、外側に蓮弁文を施す。118は龍泉窯系青磁の束口碗である。内外側に明緑灰色釉を施し、底部外面のみ露胎している。119は白磁碗で、内側見込みの釉を輪状に掻き取っている。120は染付の小椀である。混入と思われる。

②ピット出土遺物（第56図）

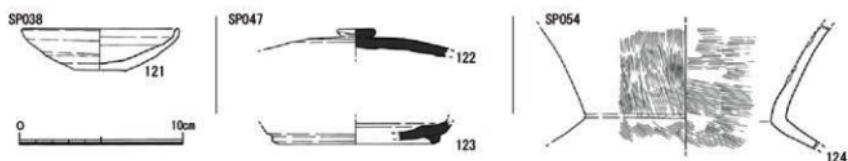
121はほぼ完形の白磁皿である。口径9.6cm、器高2.5cm。SP038出土。122はつまみを持つ須恵器壺蓋、123は高台付きの須恵器壺である。ともにSP047から出土した。124は土師器壺の頸部である。外側には縦方向のハケメ、内側には横方向のハケメを施す。SP054出土。

③その他の遺物（第57図）

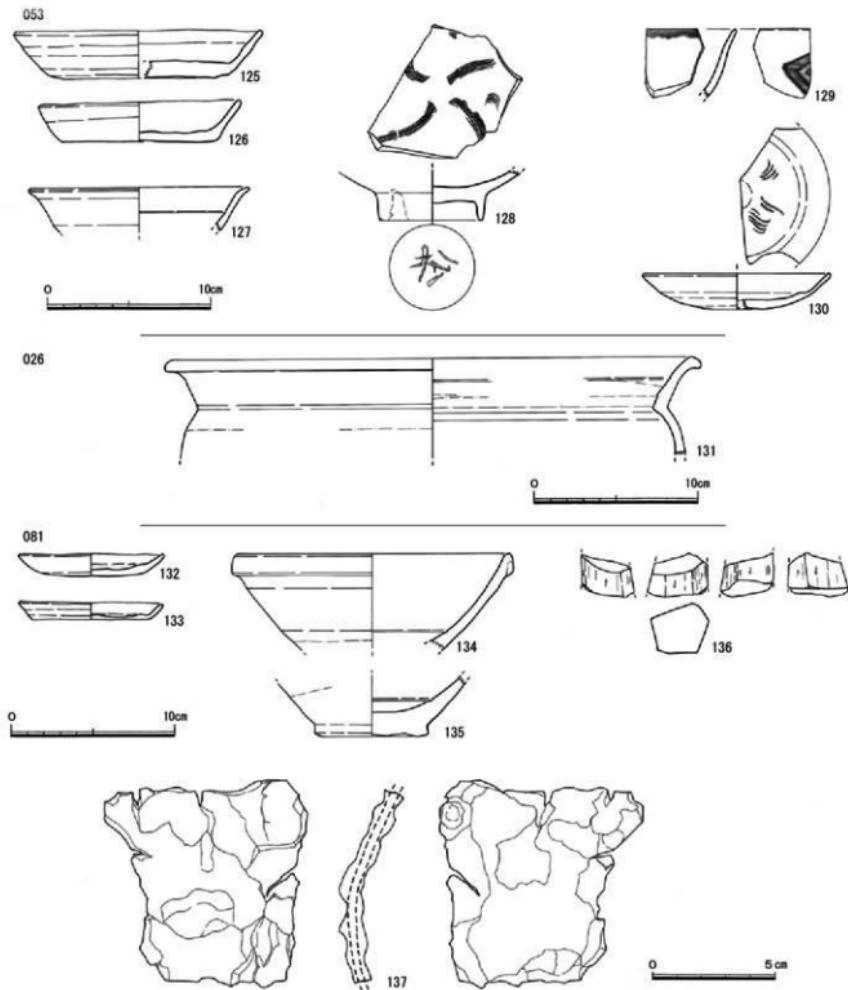
125～130はSK048・052の北東部分の黒褐色砂を遺構番号053として取り上げたものである。125・126は土師器の壺、127・128は白磁の碗である。128は底部外面に墨書きが見られるが判然としない。



第55図 SK052出土遺物実測図 (1/3)



第56図 SP038・047・054出土遺物実測図 (1/3)



第57図 053・068・081出土遺物実測図 (1/2・1/3)

129は染付椀で、SX001からの混入か掘り残しの可能性がある。130は青磁皿である。131はにぶい黄色釉の陶器盤で、復元口径32.8cm。068からの出土。132～137は調査区東壁際中央付近の黒褐色砂を遭構番号081として取り上げたものである。132・133は土師器皿、134・135は白磁椀。136は花崗岩製の砥石である。断面五角形状で、いずれの面も使用している。137は鉄製の鍋か。

4. 第3面の調査

(1) 概要

標高4.0m付近の砂丘砂を検出面とした。検出した遺構は溝、土坑、ピットで、遺構の密度は薄い。遺構は古墳時代～古代のものと思われる。調査区を横断する古代の溝SD074はほぼ東西方向で、周辺で検出されている古代官衙遺構の方向とも合致する。

(2) 遺構と遺物

①溝 (SD)

SD074 (第58図)

調査区中央を東西方向に横断する溝である。検出時は褐色砂が約1.4～1.8mの幅で見られたが、掘り下げたところ幅0.7～1.0mの溝となった。深さ50cmで、溝の断面は緩やかなV字形である。遺物は土師器、須恵器、白磁、瓦片、製塩土器等が出土した。

出土遺物 (第59図)

138・139は南側の緩斜面から出土した。138は土師器壺の口縁部、139は丸瓦。140は須恵器の蓋、141・142は須恵器壺の口縁部、143は高台付きの須恵器壺である。144は土師器壺の口縁部、145は土師器壺で底部調整はヘラ切り。146は白磁碗で内面の釉を輪状に掻き取っている。底部外面には墨書きが見られる。上面からの混入か。147は移動式カマドの破片、148は製塩土器の破片である。

②土坑 (SK)

SK071 (第60図)

調査区西壁際で検出した土坑である。長軸0.9m、短軸0.7m以上の隅丸方形で、深さ15cm程度で遺存状況は悪い。15～30cmの石を2個ずつ2例に並べ、その脇から完形の土師器壺が出土した。石の一部は赤変している。出土遺物は図示した土師器壺のみで、古墳時代の遺構と思われる。

出土遺物 (第61図)

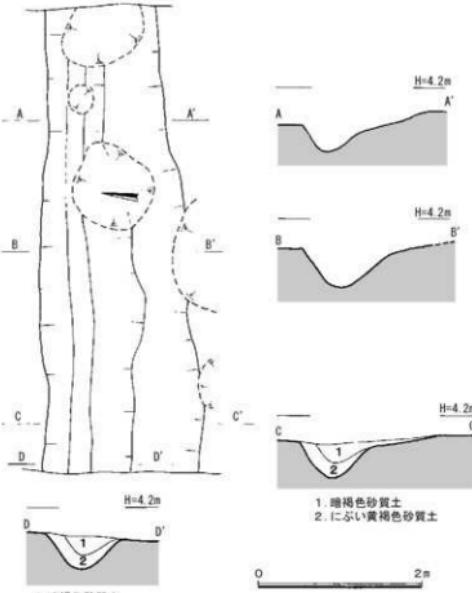
149はほぼ完形の土師器小型丸底壺である。口径7.1cm、器高7.0cm、胎土は精良緻密である。胴部下半はケズリを、内面にはナデを施している。

SK075 (第60図)

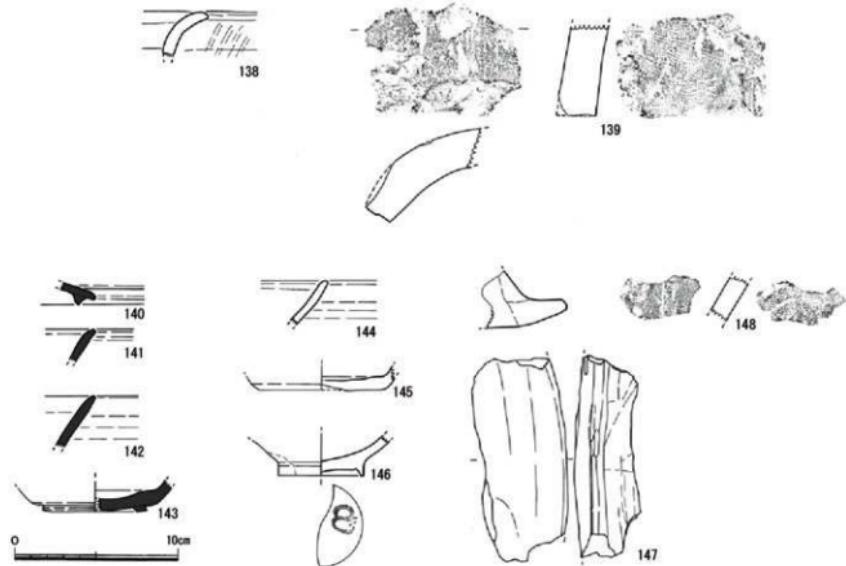
調査区南東端で検出した円形土坑。調査区外に広がるため規模は不明である。深さ40cmで、底面から緩やかに立ち上がる。埋土は褐色砂で、土師器が少量出土した。古墳時代の遺構の可能性がある。

出土遺物 (第61図)

150は小型器台の口縁部片か。151～153は鉢あるいは高壺の口縁部片か。154は土師器壺の胴部である。球形の胴部で器壁は薄い。外面はハケメ、内面はケズリを施している。



第58図 SD074 実測図 (1/60)



第59図 SD074 出土遺物実測図 (1/3)

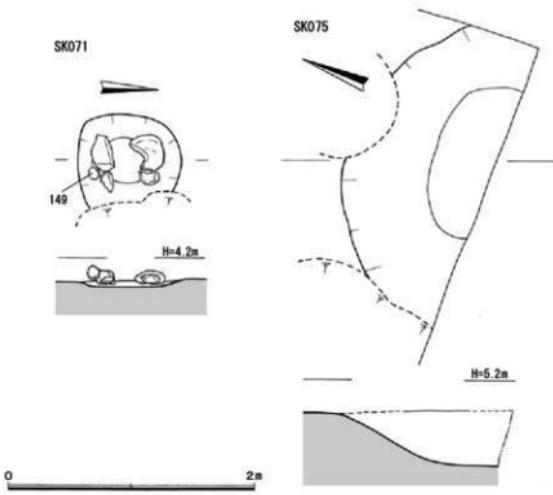
③ピット出土遺物

(第62図)

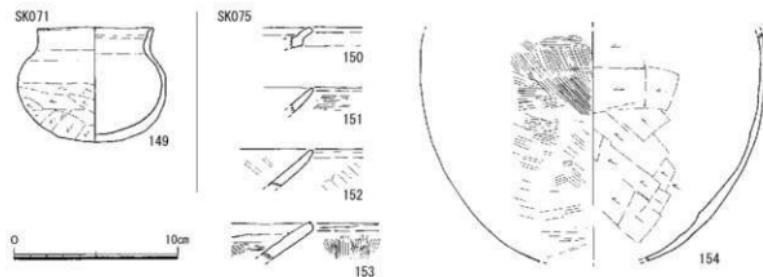
155は古墳時代土器器の小型器台脚部である。据部径11.6cm、残存器高7.3cm。外面はミガキ、内面は細かなハケメを施す。径1.2cmの孔が2箇所に穿たれている。調査区中央のSP078より出土。

④その他の遺物 (第62図)

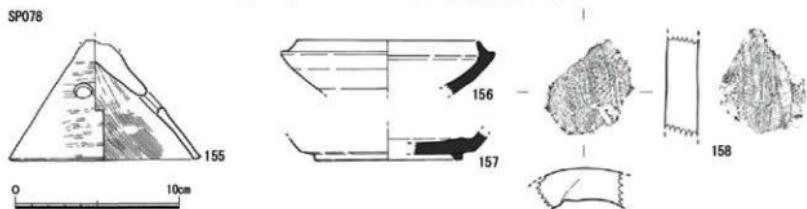
156は古墳時代後期の須恵器坏身、157は古代の高台付き須恵器の坏身である。158は丸瓦の破片。いずれも第3面検出時の遺物である。



第60図 SK071・075 実測図 (1/40)



第 61 図 SK071・075 出土遺物実測図 (1/3)

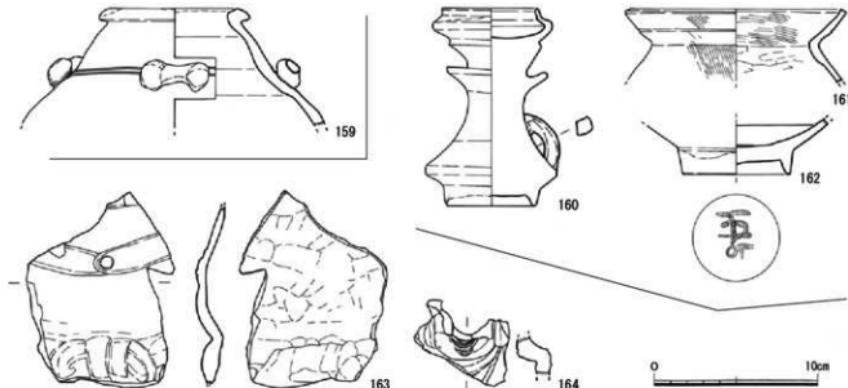


第 62 図 SP078、その他の 4 面出土遺物実測図 (1/3)

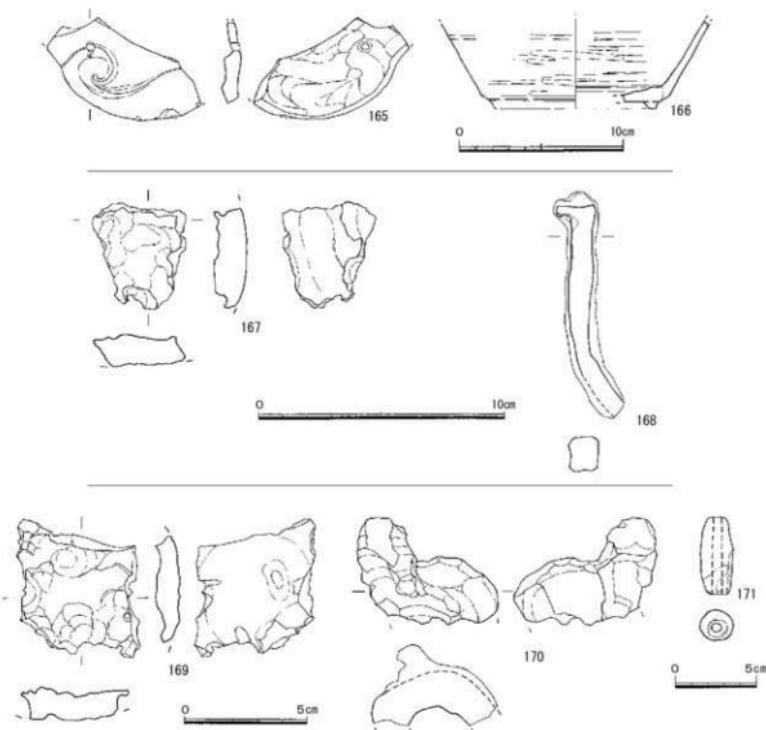
5. その他の出土遺物 (第 63・64 図)

159～162 は 1 面掘り下げ時の出土。159 は陶器四耳壺、160 は黒色陶器、161 は古墳時代前期の土師器甕。162 は白磁椀。底部外面の墨書は不明瞭。163・164 は素焼きの人形である。

165 も素焼きの人形片、166 は古代の高台付き土師器坏。内外面に丁寧な研磨を施す。167 は椀形甕、168 は鉄釘である。167・168 は 1 面から 2 面への掘り下げ時の出土。169 は椀形甕、170 は鞆羽口、171 は土鍤である。169～171 は 2 面から 3 面への掘り下げ時の出土。



第 63 図 その他の出土遺物実測図① (1/3)



第64図 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)

6.まとめ

今回の調査では計3面の調査を行い、近世、中世前半、古代・古墳時代の3時期を中心とする遺構が検出された。SX001とした調査区中央の大型廃棄土坑からは多量の近世瓦や近世陶磁が出土した。中世の土坑からは土師器・陶磁器が多数出土し、第235次調査と同様に墨書き土器が多く見られる。第3面とした砂丘面の調査では、ほぼ東西方向に延びる古代の溝SD074を検出した。本地点周辺は古代の官衙域に想定されており、官衙域を示す区画溝の可能性もある。また、蘿羽口や椀形溝といった鍛冶関連遺物の出土も注目される。



1. 1面全景（南より）



2. 2面全景（南より）



3. 3面全景（南より）

図版6



1. 西壁土層（東より）



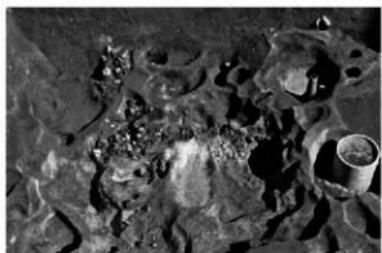
2. 南壁土層（北東より）



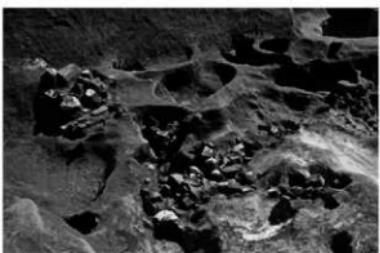
3. 東壁土層（西より）



4. SK004 土層（東より）



5. SX001 瓦出土状況①（西より）



6. SX001 瓦出土状況②（北西より）



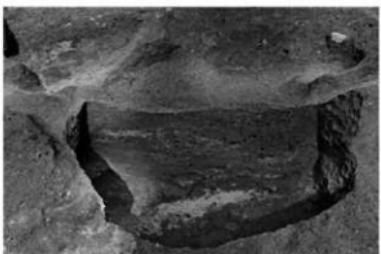
7. SX001 瓦出土状況③（南より）



8. SX045 土層（北より）



1. SK040 土層（北より）



2. SK048 土層（南より）



3. SK071 検出状況（東より）



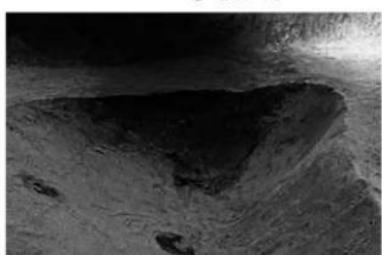
4. SD074 ①（西より）



5. SD074 ②（西より）



6. SD074 ③（東より）

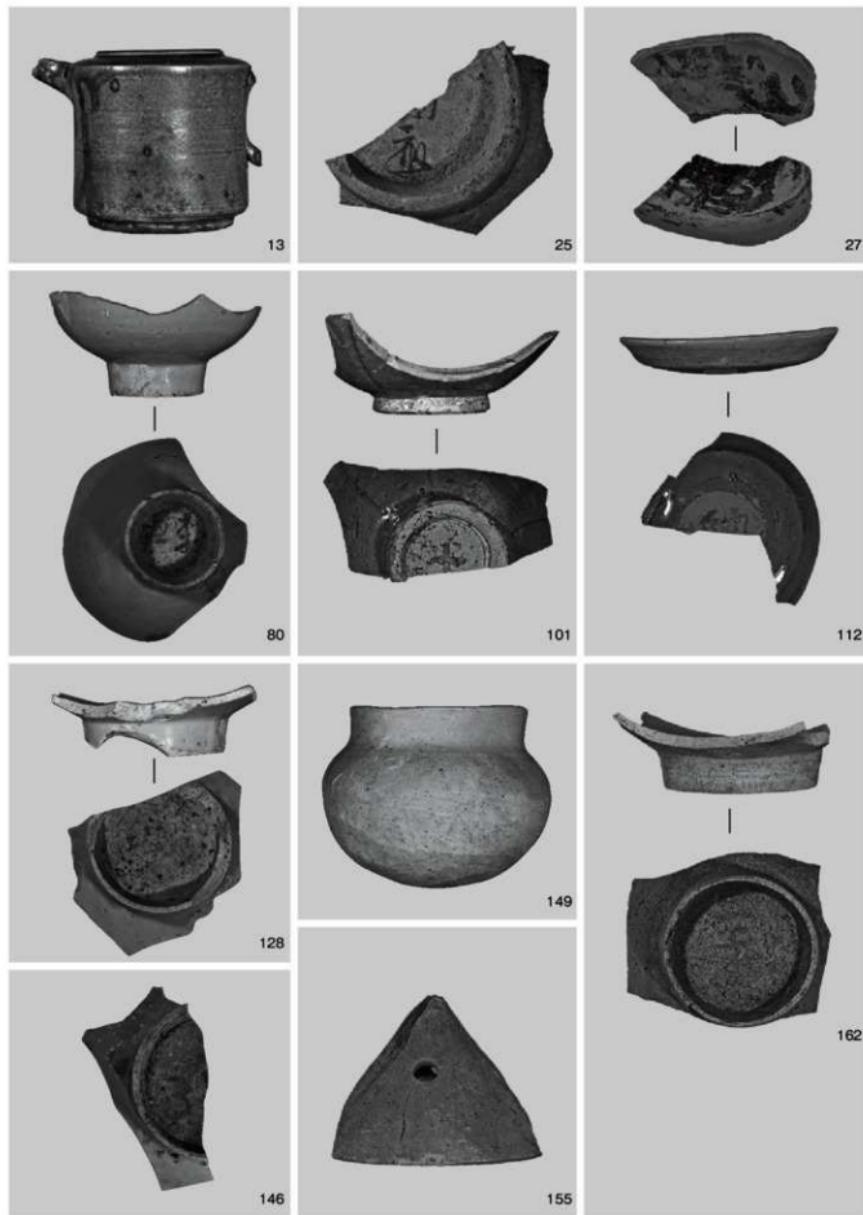


7. SD074 土層（東より）



8. SK075 土層（北東より）

図版8



出土遺物

V 博多遺跡群第 235・236 次調査出土ガラス製品の保存科学的調査

比 佐 陽一郎

博多遺跡群第 235・236 次調査で出土したガラス製品 4 点について、材質分析を中心とした保存科学的調査を行い、先行研究に基づくガラスの位置付けを試みる。出土ガラスの材質的な分類は、肥塙隆保氏らの成果に準拠する（肥塙 2001、肥塙ほか 2010）。調査はガラスの材質、組成を非破壊的手法により明らかにすることを目的として、蛍光 X 線分析を行うとともに、製作技法の確認を目的として顕微鏡観察を行った。分析装置の仕様、分析条件は次のとおり。

エネルギー分散型微少部用蛍光 X 線分析装置 (AMETEK・EDAX Orbis)：対陰極：ロジウム (Rh)／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20kV、電流値： $1000 \mu\text{A}$ ／測定雰囲気：真空／測定範囲 $0.3\text{mm} \phi$ ／測定時間 180 秒

本来であれば蛍光 X 線の分析結果は定量値で示す方が理解しやすいが、本調査は非破壊による表面分析で行っているため埋蔵環境下での組成の変化なども想定される。また標準化のための標準資料を持たないこともあり、結果は定性的な表記にて行う。

(1) 第 235 次調査出土資料

C042：無色透明で湾曲した板状の破片である。ガラスの主成分である珪素 (Si) の他、カルシウム (Ca) が明瞭に認められる。更にアルミニウム (Al) や、微弱ながらナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg) も見られることから、ソーダ石灰ガラスと考えられる。基礎ガラスに関連する以外の元素では、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ヒ素 (As) が認められる。

C044（遺物番号 32）：白色で半～不透明の容器蓋破片である。舍利容器とされる小壺の蓋の一部で、博多遺跡群では形状の類似する資料が 30 点程度ある他、京都の宇治平等院本尊阿弥陀如来坐像台座華盤納入品にも類例が見られる（中井ほか 2012）。しかし、これらは多くが青や緑色で、白色はきわめて事例が少ない。唯一、203 次調査で同じく下半部の破片が出土している（比佐 2021）。

珪素と鉛 (Pb) が強く検出される。カリウム (K) も認められることから中世に通有のカリウム鉛ガラスと考えられるが、分析箇所によってはカルシウムもカリウムのピークを上回る程度に検出される。同時にリン (P) も明瞭なピークとして認められる。これらの事から白色で透明度の低い色調は、骨灰の使用が推定されるものの、類例の X 線回折分析で骨成分は検出されず、推測の域を出ない。



235 次 C044 外観画像（原寸大）



同左デジタルマイクロスコープ画像

吹きガラスの技法で製作されたと考えられ、実際に復元実験も行われている（藤原ほか 2012）。本資料では下端部に吹き竿が外れたと見られる痕跡が残り、その部分に黒色の付着物が認められる。この箇所の分析では、鉄が強く検出されており、鉄製の吹き竿の使用が想定される。

C046（遺物番号 110）：青色で透明感のある小玉である。巻き付けで作られたと見られる螺旋状の段が観察できる。珪素、鉛の他、カリウムが明瞭に検出されており、カリウム鉛ガラスであることが分かる。他にアルミニウム、鉄、銅（Cu）といった元素が認められる。色調から銅が着色要因と考えられる。

（2）第 236 次調査出土資料

C017（遺物番号 49）：透明感のある青色の小玉である。235 次 C046 とよく似た組成を示す。銅で着色されたカリウム鉛ガラスと見られる。



235 次 C046 デジタルマイクロスコープ画像



236 次 C017 デジタルマイクロスコープ画像

今回調査を行った資料の内、C042 は無色透明の色調で、ヒ素が検出されている。中世の無色透明ガラスの場合、ヒ素は見られない。ヒ素は近代以降のガラスで精澄剤として使われる他、マンガンは消色剤として知られている。形状とも合わせて近代以降の製品である可能性が高い。

その他の容器蓋、小玉 2 点は、組成、形状、色調いずれも中世のガラスとして違和感のないものである。特に白色容器蓋の類例である博多 203 次の事例は、鉛同位体比分析で対州鉱山の値が示されている（斎藤 2021）。青色の小玉についても、203 次調査で出土した製作痕跡資料に類例が含まれております（比佐 2021）、調査地点の近隣で製作された可能性が考えられる。

肥塚隆保 2001「古代ガラスの材質と鉛同位体比」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 86 集 国立歴史民俗博物館
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』11／平成 22 年（566 号）第一法規株式会社

斎藤努 2021「博多遺跡群第 203 次調査出土資料の鉛同位体比分析について」『博多 170—博多遺跡群第 203 次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集 福岡市教育委員会

中井泉・白瀧潤子・井上曉子 2012「平等院本尊阿弥陀如来坐像台座華盤納入品のガラス片についての化学分析」『瓢翔学報』第 8 輯 平等院

比佐陽一郎 2021「金属製品、生産関連資料、その他資料」『博多 170—博多遺跡群第 203 次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集 福岡市教育委員会

藤原信幸・海藤博・井上曉子 2012「平等院本尊阿弥陀如来坐像台座華盤納入品のガラス片の調査と容器の復元制作」『瓢翔学報』第 8 輯 平等院

報 告 書 抄 錄

博多 186

—博多遺跡群第 235 次・236 次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1453 集

2022 年（令和 4 年）3 月 24 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
TEL (092) 711-4667

印刷 松古堂印刷株式会社
福岡市西区周船寺 1 丁目 8 番 1 号
TEL (092) 806-1661
